

嘉麻市文化財調査報告書 第4集

# 沖出古墳Ⅱ

平成9・10年度の範囲内容確認調査



2017

嘉麻市教育委員会





嘉麻市文化財調査報告書 第4集

# 沖出古墳Ⅱ

平成9・10年度の範囲内容確認調査

2017

嘉麻市教育委員会





1. 古墳遠景



2. 古墳全景

整備後の沖出古墳



# 序

本書は、平成9年度、10年度に沖出古墳の保存整備を目的として実施いたしました発掘調査の報告書です。

昭和62年度、63年度に行われた調査では、前方部2段、後円部3段築成の前方後円墳であることが推定されたほか、埋葬施設については度重なる盗掘を受けていたにもかかわらず、鍬形石、車輪石、石釧の破片が出土し、九州では前例のない3種類の腕輪形石製品の副葬が確認されたことは、大きな成果でありました。

前回の調査に続き、本調査では、くびれ部の葺石や埴輪列などが確認されたほか、墳丘上からは多量の埴輪が出土し、中には当時の他界観念を表すと考えられる「船」を描いた線刻埴輪も出土するなど、沖出古墳の復元整備を行う上で、貴重な成果を挙げることができました。

しかしながら、これまで本調査の成果を正式に報告する機会に恵まれず、20年の歳月が流れてしまいました。教育委員会では、九州を代表する古墳の一つである沖出古墳の貴重な調査成果を周知し、筑豊地域の歴史文化の向上につながるよう本調査の報告書を刊行することといたしました。本書が学術研究の基礎資料として、多くの皆様の利用するところとなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査及び報告書の刊行にあたり、関係各位にご協力、ご援助いただきましたことを深く感謝いたします。

平成29年3月31日

嘉麻市教育委員会

教育長 木 本 寛 昭



## 例 言

- 1 本書は、平成9年度及び10年度に実施した沖出古墳の史跡整備にかかる範囲内容確認調査に関する報告書である。
- 2 発掘調査及び遺物整理作業は稲築町教育委員会社会教育課が行い、遺物再整理及び報告書作成は嘉麻市教育委員会生涯学習課で行った。
- 3 本書に掲載した遺構実測図は上野智裕、遺物実測図は下記参加者の協力を得て、松浦宇哲、舌間悟が作成した。  
参加者：上田津由美、小澤利満、神 啓崇、常盤拓生、中井 歩、福永将大、三浦 萌
- 4 本書掲載図の製図作業は舌間悟、稲見幸、佐藤知子、平田麻里子が行った。
- 5 本書に掲載した遺構写真は上野智裕、遺物写真は松浦宇哲、舌間悟が撮影した。
- 6 本書に使用した方位は磁北を示し、標高は海拔を示す。
- 7 遺物の色調は『新版 標準土色帖』（財団法人日本色彩研究所）を参考としている。
- 8 図版の遺物写真に付した番号は本文挿図の遺物番号を示す。
- 9 本書の執筆・編集は松浦宇哲が行った。
- 10 出土遺物、写真、図面はすべて嘉麻市教育委員会にて保管している。

# 本文目次

I	調査の契機と経過	1
1.	調査の契機	1
2.	調査の経過と組織体制	1
3.	保存整備の概要と経過	2
II	位置と環境	3
III	調査の記録	6
1.	古墳の現状と調査区の設定	6
2.	墳丘の調査	6
3.	埋葬施設の補足調査	17
4.	出土遺物	18
IV	考察	39
1.	墳丘の復元	39
2.	埴輪の構成と配置	42
V	総括	46

# 図版目次

## 巻頭図版 整備後の沖出古墳

図版1	沖出古墳の調査状況	図版11	後円部出土の埴輪
図版2	後円部の調査1 (Ⅲトレンチ)	図版12	前方部出土の埴輪1
図版3	後円部の調査2 (Ⅱ・Ⅴ・Ⅵトレンチ)	図版13	前方部出土の埴輪2
図版4	後円部の調査3 (Ⅺトレンチ)	図版14	前方部出土の埴輪3
図版5	前方部の調査1 (Ⅰ・Ⅳトレンチ)	図版15	前方部出土の埴輪・土師器
図版6	前方部の調査2 (Ⅶ・Ⅹトレンチ)	図版16	北側くびれ部出土の埴輪1
図版7	北側くびれ部の調査1 (Ⅸトレンチ)	図版17	北側くびれ部出土の埴輪2
図版8	北側くびれ部の調査2 (Ⅸトレンチ)	図版18	南側くびれ部出土の埴輪1
図版9	南側くびれ部の調査1 (Ⅷトレンチ)	図版19	南側くびれ部出土の埴輪2
図版10	南側くびれ部の調査2 (Ⅷトレンチ)	図版20	南側くびれ部出土の埴輪3

# 挿 図 目 次

第1図	弥生・古墳時代主要遺跡分布図（1／50000）	5
第2図	墳丘測量図（1／400）	7
第3図	調査区配置図（1／400）	8
第4図	Ⅲトレンチ実測図（1／80）	9
第5図	Ⅱトレンチ実測図（1／80）	10
第6図	Vトレンチ実測図（1／80）	11
第7図	Ⅵトレンチ実測図（1／80）	12
第8図	XIトレンチ実測図（1／80）	12
第9図	Iトレンチ実測図（1／80）	13
第10図	Ⅳトレンチ実測図（1／80）	14
第11図	Ⅶトレンチ実測図（1／80）	14
第12図	Ⅸ・Ⅹトレンチ実測図（1／60）	16
第13図	Ⅷトレンチ実測図（1／60）	17
第14図	竪穴式石室実測図（1／50）	19
第15図	後円部出土の埴輪実測図（1／6、1／2）	20
第16図	前方部出土の円筒埴輪実測図（1／6）	22
第17図	前方部出土の朝顔形埴輪実測図（1／6、1／2）	24
第18図	前方部出土の壺形・朝顔形埴輪、土師器実測図（1／6、1／4）	27
第19図	北側くびれ部出土の埴輪実測図（1／6）	30
第20図	南側くびれ部出土の円筒埴輪実測図（1／6）	32
第21図	南側くびれ部出土の壺形・朝顔形埴輪実測図（1／6）	35
第22図	家形埴輪実測図（1／4）	36
第23図	墳丘復元図（整備案）	39
第24図	墳丘復元図（1／500）	40
第25図	埴輪配置推定図	44
第26図	副葬品と供献土器	47
第27図	筑前地域の大型前方後円墳	49

# I 調査の契機と経過

## 1. 調査の契機

沖出古墳は、昭和2年に柴田喜八によって「筑前漆生の古墳群」として学術雑誌（『考古学雑誌』17-2）に紹介されており、その頃には地元でも瓢箪塚や瓢塚と呼ばれ存在が知られていた。また、沖出古墳の周辺には銅鏡を出土した石棺墓、短甲や金銅装馬具を出土した円墳、形象埴輪等を出土した前方後円墳など貴重な墳墓群が存在したが、沖出古墳を除いていずれも石炭産業による鉱害復旧工事で土取りの対象となり、適切な調査がなされないまま消滅してしまった。

こうした状況を鑑みて、稲築町では、昭和57年に『第二次稲築町総合計画』の中で沖出古墳の土地公有化と整備の指針が示され、町教育委員会によって沖出古墳保存のための基礎資料作成と学術的価値の評価を行うことを目的とした発掘調査が昭和62・63年度に実施された。本調査により古墳の規模と時期的な位置付けなどが明らかとなり、その成果は調査報告書（『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書 第2集）にまとめられている。

その後、平成4年の『第三次稲築町総合計画』基本計画（前期）及び平成8年の基本計画（後期）において、沖出古墳の具体的な整備と活用の方針が示され、平成9年に福岡県の指定史跡となり、保存整備を目的とした発掘調査が平成9・10年度に改めて実施されることとなった。

## 2. 調査の経過と組織体制

平成9・10年度調査（以下、2次調査と呼称する。）は、町単独事業で昭和62・63年度調査（以下、1次調査と呼称する。）の補足を兼ねて、1次調査で検出できなかったくびれ部や前方部幅の確認を中心に実施した。

平成9年度は、前方部南側、前方部北側、後円部南側、後円部東側裾、くびれ部南側にそれぞれ調査区を設けた。前方部北側では

「船」の線刻埴輪片が出土したほか、くびれ部では葺石と原位置を保った埴輪列が確認されるなど、くびれ部の検出に大きな成果を収めることができた。

平成10年度は、くびれ部北側、後円部北側、墳頂部北側に調査区を設けた。くびれ部北側においても葺石が確認され、墳頂部からはほぼ原位置を保った埴輪の出土もみられた。



調査指導風景

沖出古墳の2次調査及び整理作業の組織体制は次のとおりである。

(平成9年度)

調査主体	稲築町教育委員会		
総括	稲築町教育委員会	教育長	田岡 昭和
		社会教育課長	山下 陵
		社会教育係長	福澤 義信
調査・整理担当		社会教育係	上野 智裕

(平成10年度)

調査主体	稲築町教育委員会		
総括	稲築町教育委員会	教育長	田岡 昭和
		社会教育課長	野見山 務
		社会教育係長	福澤 義信
調査・整理担当		社会教育係	上野 智裕

### 3. 保存整備の概要と経過

平成12年、小田富士雄福岡大学教授(当時)を委員長とする「沖出古墳及び周辺整備指導委員会」が設置され、平成13年1月に基本設計、同年6月に実施設計が策定された。古墳は調査成果に基づき墳丘の全面復元を行い、埋葬施設は立入公開ができるよう保存整備の方向性が示された。また、周辺環境については、古代の雰囲気損なわない植生の再現を目指し、その中で郷土の歴史文化を学ぶための生涯学習の場としても活用できるようガイダンス等の施設整備を図ることとなった。以上のような整備方針に基づき、町は平成13年8月に沖出古墳公園の整備工事に着手し、平成15年2月に古墳公園が竣工した(巻頭図版)。公園の総面積は15164.4㎡(うち県指定面積:4152㎡)である。

現在は、地元小学校の遠足のほか近隣自治体と共同で実施している春と秋の遠賀川流域古墳等同時公開事業などにおいて、嘉麻市内外から多くの人々が沖出古墳の見学に訪れている。

これまで2次調査の成果の一部は、『沖出古墳公園整備事業報告書』((株)中桐造園設計研究所編2003)や『稲築町史』(稲築町史編集委員会編2004)に紹介されていたが、正式な報告書は未刊であった。嘉麻市教育委員会では、沖出古墳と出土遺物の重要性を鑑み、2次調査で多数出土した埴輪の再整理と遺物実測を実施し、平成28年度に2次調査の報告書を刊行することとなった。

#### 【参考文献】

新原正典 1989『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書第2集、稲築町教育委員会  
(株)中桐造園設計研究所編 2003『沖出古墳公園整備事業報告書』稲築町  
稲築町史編集委員会編 2004『稲築町史』上巻 稲築町

## Ⅱ 位置と環境

**位置と地理的環境** 沖出古墳（福岡県嘉麻市漆生 78 - 1、78 - 2）が所在する嘉麻市は、福岡県のほぼ中央部に位置し、平成 18 年 3 月 27 日に山田市と稲築町、碓井町、嘉穂町の三町が合併して誕生した人口 3 万 9000 人程の自治体である。本市はかつて近代日本の発展を支えた筑豊炭田の一地域として、北西側に隣接する飯塚市、桂川町とは社会的・経済的繋がりが強く、現在は、人口 12 万人を超える飯塚市を中心とした都市圏を形成している。この都市圏は、延長約 60km に及ぶ遠賀川の上流域に位置し、北側を除く三方を山塊によって囲まれた盆地地形をなしている。

盆地南部には標高 800 ～ 900m 級の古処山地がそびえ、古処山地の一つである馬見山の中腹に源を発する遠賀川が盆地内を南北に貫流する。盆地内は遠賀川とその支流によって開析された大小の丘陵が複雑に発達しており、市南部の丘陵地帯は主に中生代の花崗岩層、市北部の丘陵地帯は主に新生代の砂岩層を基盤としている。

沖出古墳は、遠賀川とその支流である山田川に挟まれた市北部の砂岩層を基盤とする低丘陵の西側先端付近に立地する。古墳の眼下には遠賀川の堆積作用によって盆地内でも広い沖積地が形成されている。古墳は、1 次調査で墳長約 68m の前方後円墳であることが判明しており、古墳の規模や立地などから被葬者は高い生産基盤を保有した人物であったことがうかがえよう。

**弥生・古墳時代の周辺遺跡（第 1 図）** 沖出古墳の周辺遺跡を概観すると、弥生時代では、複数の木棺墓、甕棺墓等から銅戈 3 本と玉類等が出土した鎌田原遺跡（23）、複数の木棺墓、石棺墓等からそれぞれ小銅鐸、銅鏡 2 面、鉄剣等が出土した原田遺跡（22）、石棺墓から銅鏡 1 面が出土した五穀神遺跡（9）や笹原遺跡（15）、漆生石棺墓（4）などが有力層の出現を示唆する遺跡として注目される。中でも、馬見山山麓の広大な台地上には、中期から終末期にかけて、椎木・上椎遺跡（20）、鎌田原遺跡（23）、原田遺跡（22）など青銅器や鉄器類を出土する墳墓群と住居群が密集しており、嘉穂盆地を代表する大型拠点集落として評価されよう。

古墳時代前期の遺跡では、方形に区画した環溝遺構と溝内から畿内系、山陰系の外来系土器が大量に出土した穴江・塚田遺跡（19）が生活遺跡として注目される。また、前期古墳の調査事例が少ない中、西ヶサコ古墳（18）は、埋葬施設に粘土槨と割竹形木棺を採用した径約 22m の円墳であることが調査で判明しており、沖出古墳に先立つ在地有力層の墳墓の一つと考えられる。

古墳時代中期の遺跡では、漆生古墳（4）、かつて塚古墳（1）などのように、鉄製武器類に加えて 1 領の短甲を副葬する円墳が散見される。これらの古墳は北部九州の地域性を示す遺跡として、当時の歴史的背景を検討する上で欠かせない資料となっている。また、堂の前遺跡（7）の調査では、1 辺 12.8m の方墳が検出され、当期の希少な埴輪片の資料が得られている。

古墳時代後期前半の遺跡では、市内で 50m 級の前方後円墳が 3 基確認されている。次郎太郎 1 号墳、2 号墳（3）は沖出古墳と同一丘陵上に位置し首長墓群を形成する。また、竹生島古墳

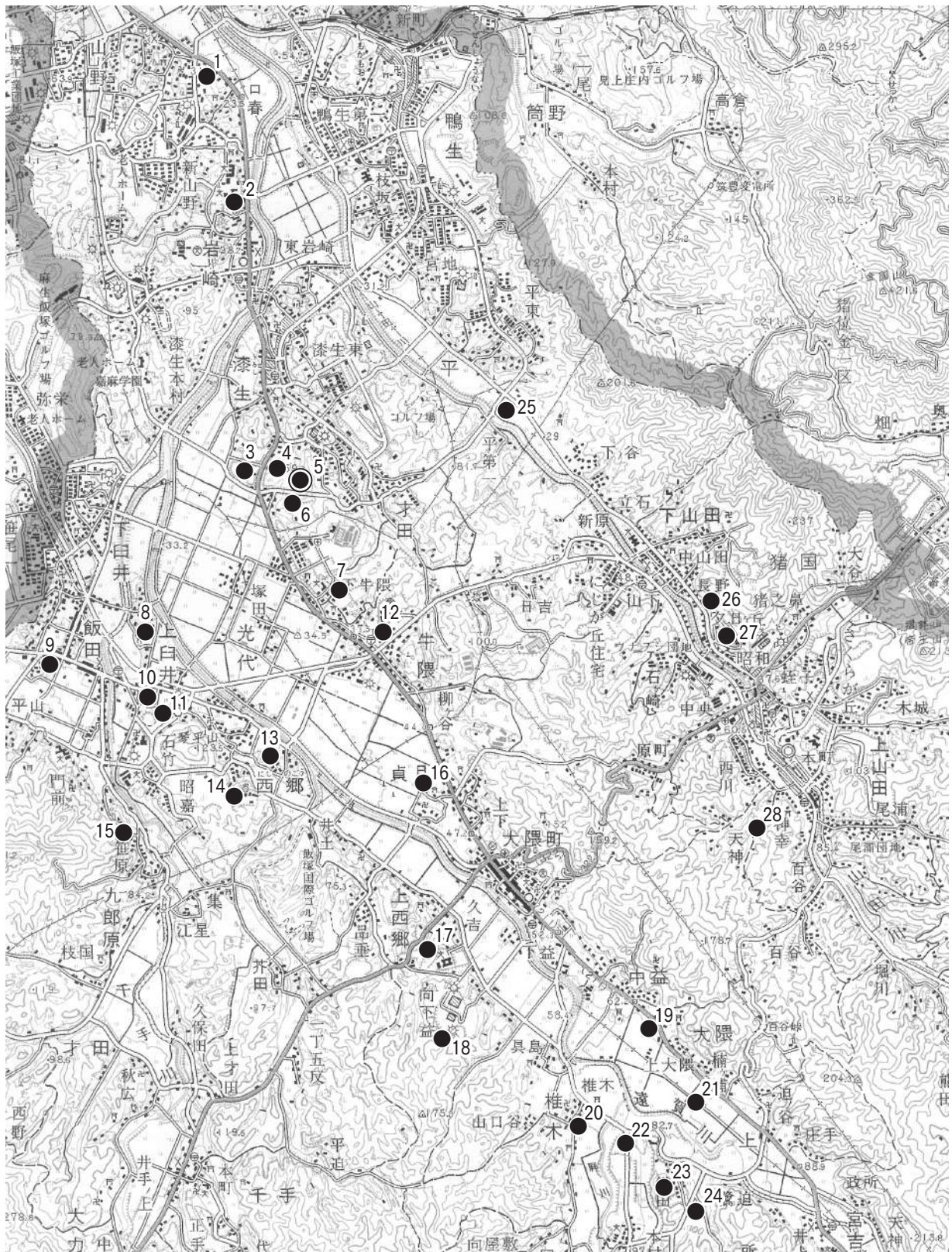
(13) は、これらの古墳群から約 2.5km 南の遠賀川対岸に位置し、近接する両者の関係が注意される。また、前方後円墳以外では、遠賀川最上流域に位置する尾畑古墳群 (24) が、著しい削平を受けていながら埴輪を出土する中型円墳群として注目される。直径 20m 規模の円墳と推定されている 1 号墳からは、円筒埴輪に加え、馬、人物等の形象埴輪が出土している。

古墳時代後期後半の遺跡では、横穴式石室を埋葬施設にもつ円墳群に加え、古第三紀の砂岩層からなる丘陵地帯には横穴墓群が多数みられる。竹生島古墳の南側に広がる丘陵にも「西郷百穴」と呼ばれる大規模な横穴墓群 (14) が形成されていて、大正年間には鳥居龍蔵らの指導によって発掘がおこなわれ、線刻壁画の報告がなされている。また、沖出古墳周辺の横穴墓群の中には、金銅装馬具や南海産の貝輪など希少な副葬品を有する漆生古墳群 (4) や才木横穴墓群 (6) のほか南九州の墓制である地下式形態の岩崎地下式横穴墓群 (2) もみられる。いずれも当期の遠賀川流域の地域性を顕著に示す遺跡であり、他地域との地域間交流を知る上で重要な遺跡である。

『日本書紀』安閑 2 年 (535) の屯倉設置記事にみられる「穂波屯倉」、「鎌屯倉」の所在地は、後の律令時代において「穂波郡」、「嘉麻郡」が置かれた嘉穂盆地内に比定されている。現在の嘉麻市域は、律令時代における「嘉麻郡」の領域に含まれることから、特に「鎌屯倉」との関連が窺える地域である。現在、「鎌屯倉」に関連する施設の所在地は明らかでないものの、市内に残る高塚古墳や横穴墓には、屯倉の運営に携わった人物も埋葬されていたはずである。沖出古墳の周辺には沖積地が広がり、丘陵上には古墳時代後期の前方後円墳のほか金銅装馬具を副葬するような有力層の横穴墓もみられることから、屯倉関連施設の有力な所在候補地の一つとなろう。

#### 【参考文献】

- 井上裕弘 1984『穴江・塚田遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第 4 集、嘉穂町教育委員会
- 上野智裕、岸本圭編 1997『次郎太郎古墳群』稲築町文化財調査報告書第 4 集、稲築町教育委員会
- 嘉麻市教育委員会編 2005『ミヤケと渡来人 記録集』嘉麻市教育委員会
- 川添昭二編 1968『嘉穂地方史』古代・中世編、嘉穂地方史編纂委員会
- 川述昭人 1980『堂の前遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第 1 集、嘉穂町教育委員会
- 児島隆人 1967「福岡県かつて塚古墳調査報告」『考古学雑誌』第 52 巻第 3 号、日本考古学会
- 児島隆人・藤田等編 1973『嘉穂地方史』先史編、嘉穂地方史編纂委員会
- 柴田喜八 1927「筑前漆生の古墳群」『考古学雑誌』第 17 巻第 2 号、日本考古学会
- 新原正典 1989『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書第 2 集、稲築町教育委員会
- 福島日出海 1987『嘉穂地区遺跡群Ⅳ』嘉穂町文化財調査報告書第 7 集、嘉穂町教育委員会
- 福島日出海 1990『嘉穂地区遺跡群Ⅷ』嘉穂町文化財調査報告書第 11 集、嘉穂町教育委員会
- 福島日出海 1997『原田・鎌田原遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第 18 集、嘉穂町教育委員会
- 福島日出海 1998「西ヶサコ古墳」『平成 8 年度生涯学習関連事業調査報告書 掘ったバイ筑豊』、筑豊市町村教育委員会連絡協議会



- |           |            |            |           |            |            |           |
|-----------|------------|------------|-----------|------------|------------|-----------|
| 1 かつて塚古墳  | 2 岩崎地下式横穴群 | 3 次郎太郎古墳群  | 4 漆生古墳群   | 5 沖出古墳     | 6 才木横穴群    | 7 堂の前遺跡   |
| 8 下白井日吉古墳 | 9 五穀神遺跡    | 10 上白井日吉古墳 | 11 御塚古墳   | 12 荒穂神社古墳群 | 13 竹生島古墳   | 14 西郷横穴群  |
| 15 笹原遺跡   | 16 貞月遺跡    | 17 久吉1号墳   | 18 西ヶサコ古墳 | 19 穴江・塚田遺跡 | 20 椎木・上椎遺跡 | 21 榎町遺跡   |
| 22 原田遺跡   | 23 鎌田原遺跡   | 24 尾畑古墳群   | 25 穴ヶ坂横穴群 | 26 長野古墳    | 27 長野横穴群   | 28 百々浦横穴群 |

第1図 弥生・古墳時代主要遺跡分布図



### Ⅲ 調査の記録

#### 1. 古墳の現状と調査区の設定

古墳は標高約 40m の丘陵西端に立地する。西側の墳丘は後世の開墾によって著しく改変を受けているが、全体に良好な前方後円形を留めていることが分かる（第 2 図）。

昭和 62・63 年度の 1 次調査では、墳丘各所に 9 箇所の調査区（A～I）を設け、墳丘規模と主体部の確認を目的とする範囲内容確認調査を実施した。古墳は墳丘斜面を葺石で覆い、家形埴輪、壺形埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪を樹立させた墳長約 68m の前方後円墳であることが確認された。また、葺石の残存状況から後円部に 3 段、前方部に 2 段の段築がみられることも推定された。埋葬施設については複数の盗掘坑が確認され、竪穴式石室の遺存状況も決して良好ではなかったものの、規模や構造等の解明については一定の成果をあげている。副葬品については、大半が盗掘等によって消失していた中、鉄刀 1 振が石室内から原位置を保って出土したほか、小片ながらも石釧、車輪石、鋏形石の腕輪形石製品の副葬が確認できたことは大きな成果であった。

しかし、1 次調査では墳丘各所に設置したトレンチ内の流れ込みの葺石を完全に除去できておらず、葺石の基底石やくびれ部の検出までには至っていなかった。こうした課題を踏まえて、平成 9・10 年度の 2 次調査では、古墳整備に向けて墳丘構造を明らかにする目的で、くびれ部から前方部を中心に 11 箇所の調査区（I～XI）を改めて設けた（第 3 図、図版 1）。

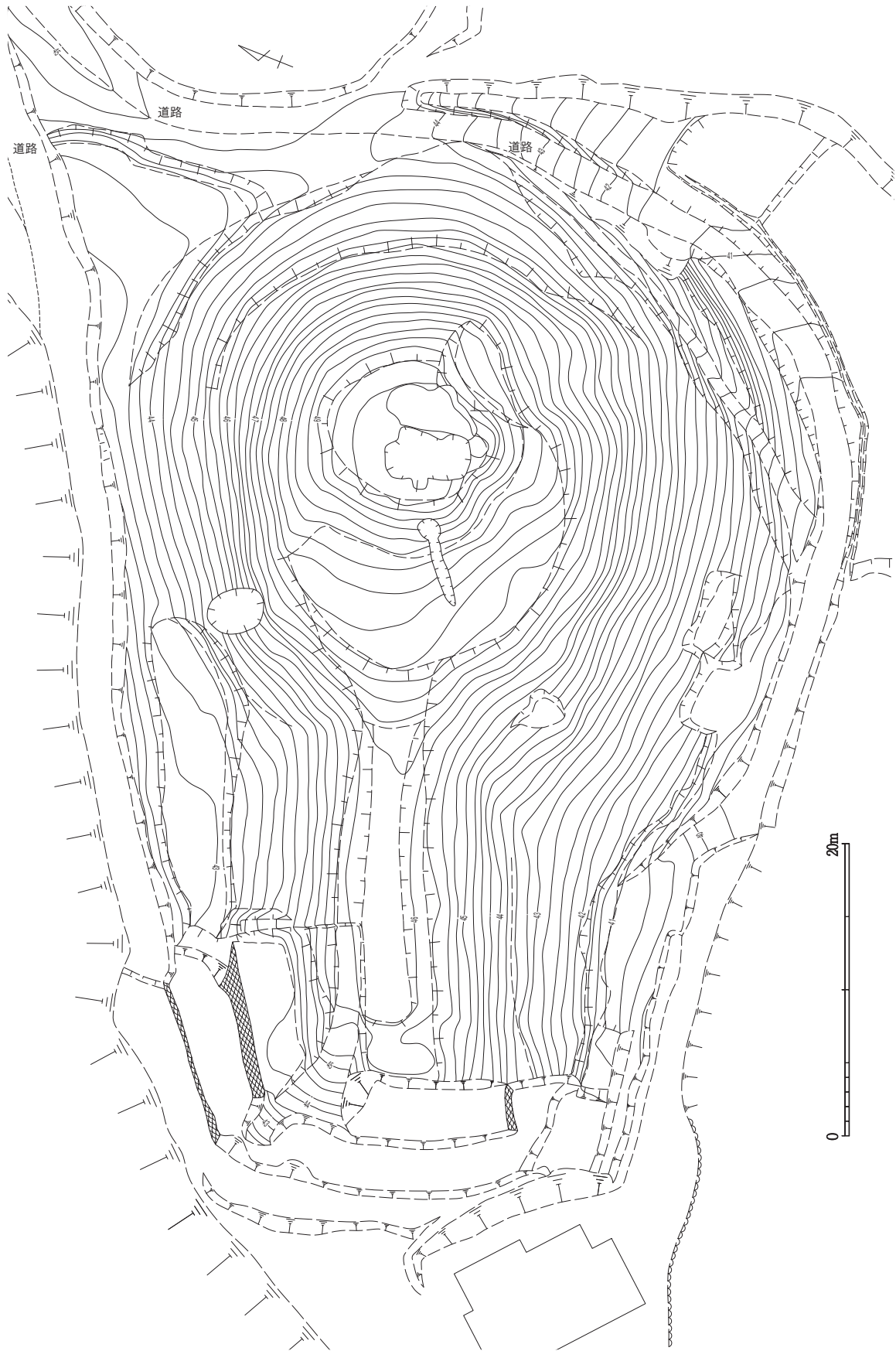
#### 2. 墳丘の調査

##### （1）後円部の調査

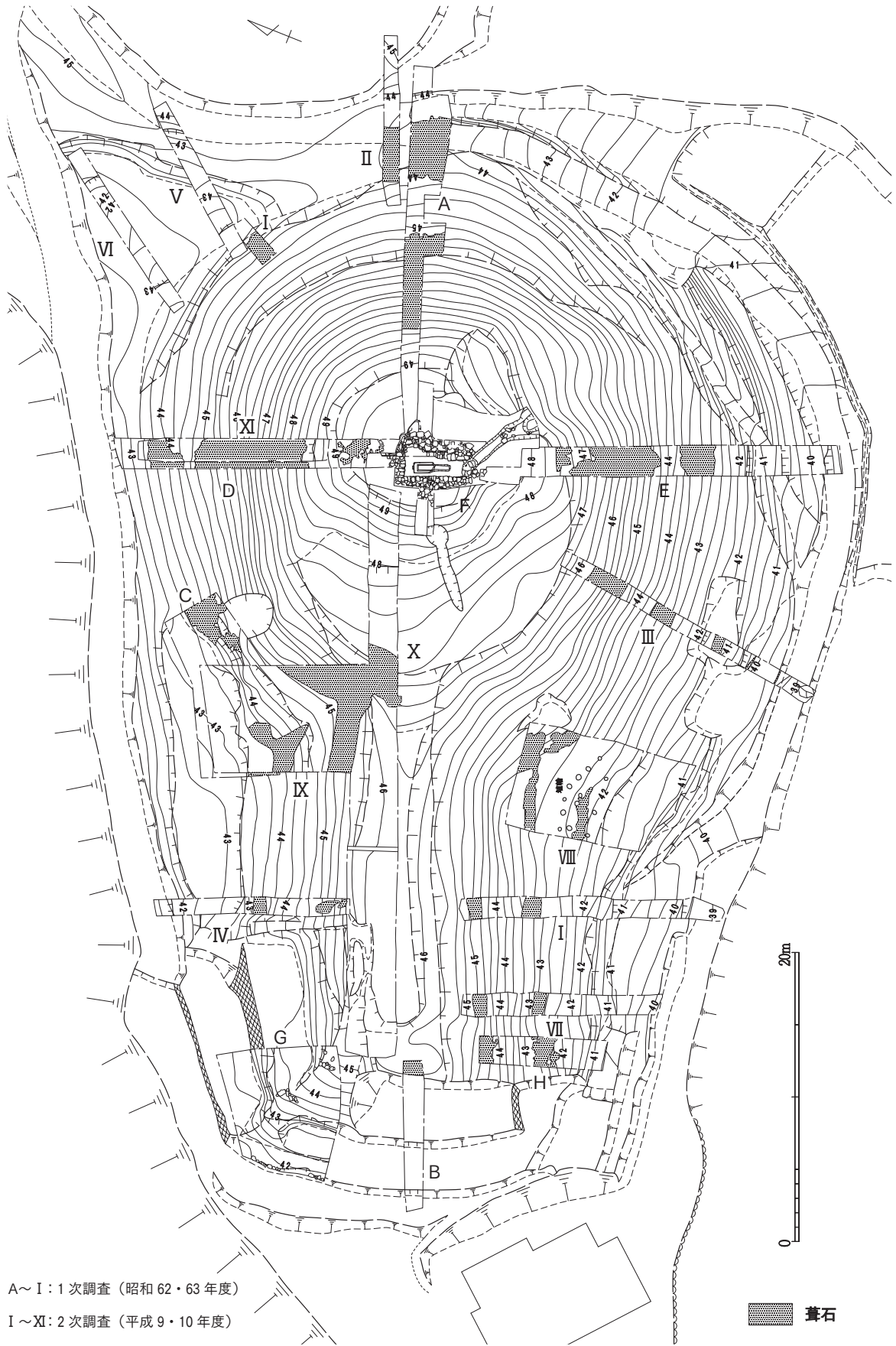
##### Ⅲ トレンチ（第 4 図、図版 2）

後円部南側斜面に設けた調査区である。トレンチ内の上側で基底石列が残る葺石面が 2 箇所検出された。トレンチ内の下側にも葺石状の礫溜りが 2 箇所みられたが、いずれも上部から流れ落ちて堆積したものと思われる。上段の葺石は大半が良好に残存しており、基底石にはやや大振りの石材を用いている。風雨によるものか下段のように明瞭な平坦面は確認できなかったが、標高約 44.5m 地点がテラス面となろう。下段の葺石は下半分程が残存しており、基底石には上段と同様にやや大振りの石材を用いている。墳裾は標高約 42.6m の地点となるが、基底石の前面には幅 0.7m 弱のテラス状の平坦面が設けてあり、さらに下側を基壇状に地山を削り出している。後述のように平野部に面する墳丘南側を大きく見せる意図が推察される。第 4 章で考察しているように、上段が第 2 段斜面、下段が第 1 段斜面に相当するものと思われる。また、第 3 段斜面については、一部盛土によって造成されている可能性があり、流出した再堆積層が現状で確認される。

本調査区からは壺形、朝顔形の埴輪片が出土しているが原位置を留めるものはなかった。また、1 点のみ線刻を有する埴輪片も出土している。



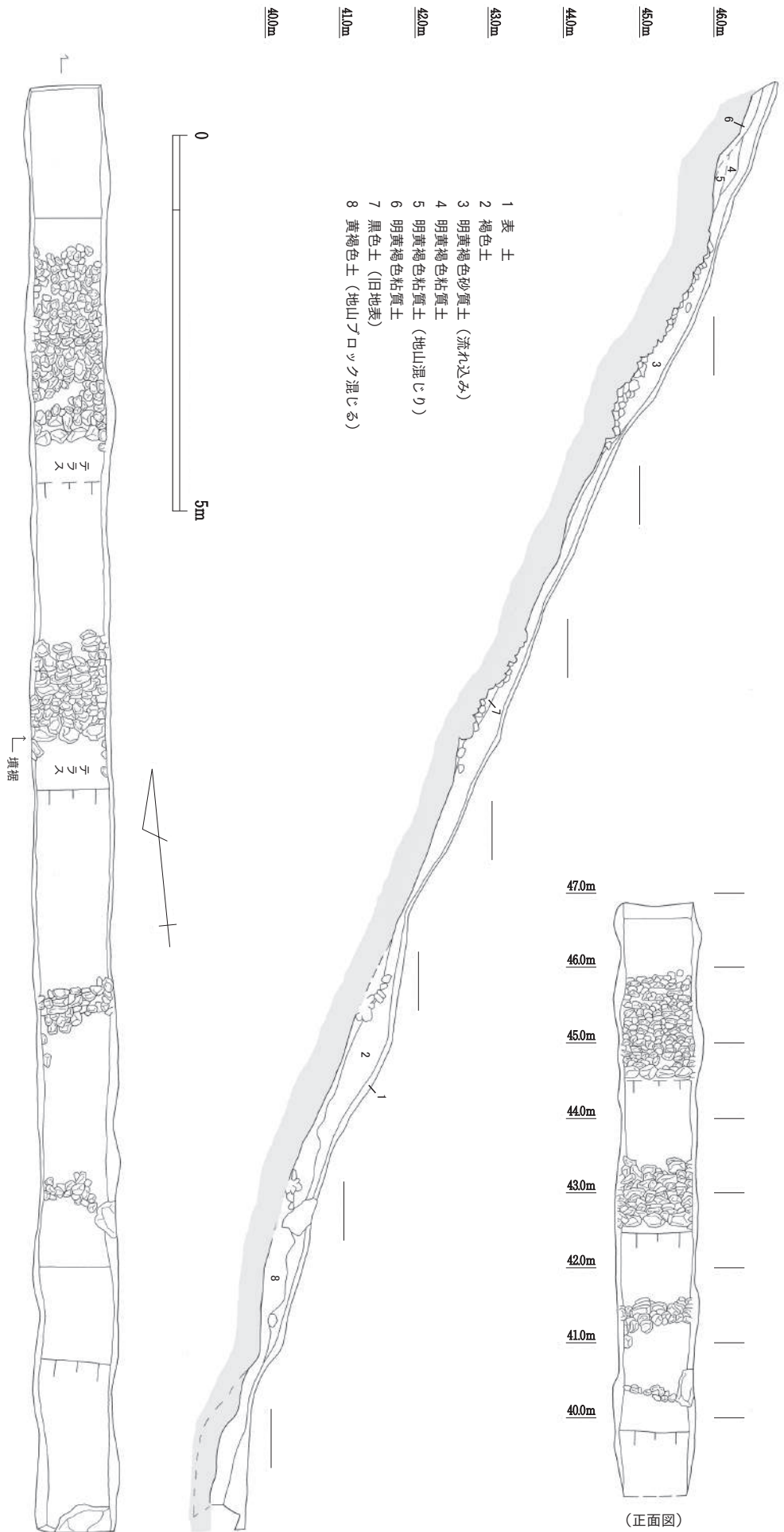
第2図 墳丘測量図



A～I：1次調査（昭和62・63年度）

I～XI：2次調査（平成9・10年度）

第3図 調査区配置図



第4図 IIIトレンチ実測図

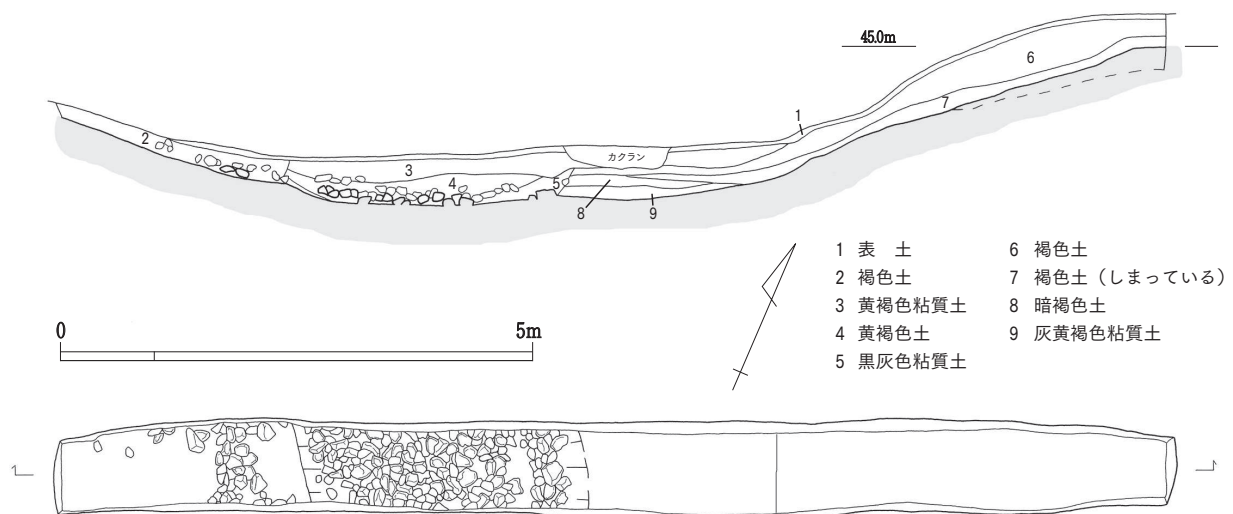
II・V・VIトレンチ（第5～7図、図版3）

古墳は丘尾切断により丘陵と後円部を堀切状に分断して造成されており、II・V・VIトレンチは丘陵と墳丘の切断箇所にて設けた調査区である。1次調査のAトレンチで確認された溝内の「石敷遺構」はIIトレンチにおいても確認されたが、V、VIトレンチでは確認されず、溝内全面に広がることはないようである。1次調査では、将来の課題としながらも「石敷遺構」については、墳丘築造後に何らかの手が加えられた人工物として判断していたが、礫中に埴輪片や須恵器片が多く混在することや各調査区においても墳丘から葺石がかなり崩れ落ちている状況などを考慮すると、崩れ落ちた葺石の自然堆積と判断してよいものと思われる。

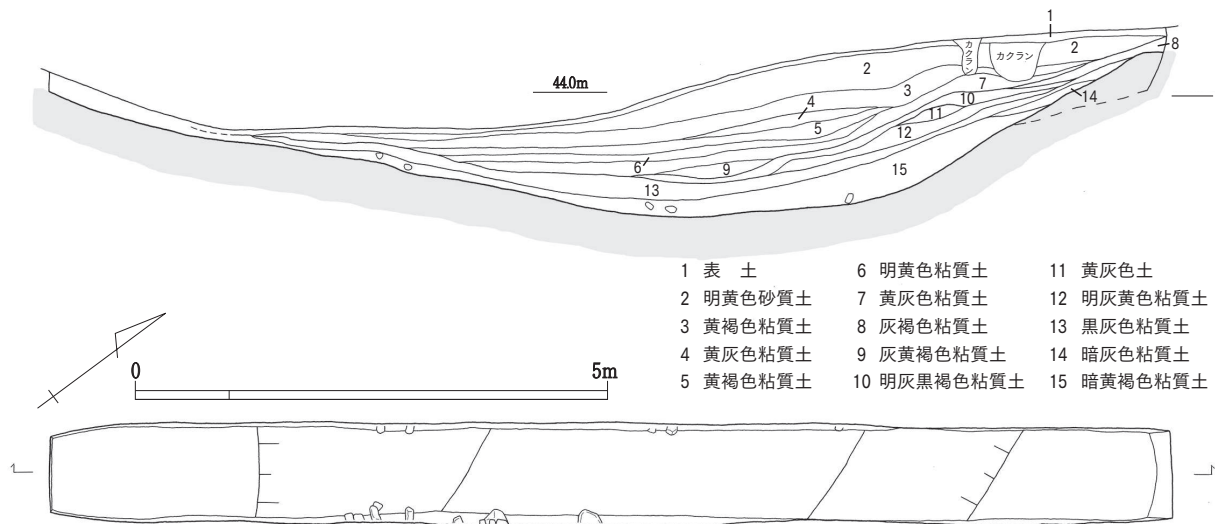
IIトレンチでは溝幅6m弱、底部は標高約43.3m、Vトレンチでは溝幅8m弱、底部は標高約42.7m、VIトレンチでは溝幅9m弱、底部は標高約42.6mで、東側から北側へ幅を広げながら後円部の周囲を緩やかにめぐっているようである。後円部南側の状況については調査区を設けていないため詳細は不明であるものの、現状から推察すれば北側と同様に東側から南側へ幅を広げながら浅い溝が緩やかにめぐることがあろう。

XIトレンチ（第8図、図版4）

後円部北側に設けた1次調査のDトレンチを再度、確認する目的で設置した調査区である。上部の斜面はほぼ全面にわたり葺石が検出されているが、全体的に雑然としており、基底石となるものも判然としない。また、標高約45m付近において、1次調査では確認できなかった幅0.9m程のテラス面を確認した。下部の斜面では、調査区内の下側で大振りの石材を用いた石列が検出されているが、第4章で考察しているようにこれが第1段斜面の基底石と判断すると、北側はいびつな円形プランとならざるを得ず、基底石列なのかどうか現状で断定できない。出土遺物は埴輪片がみられるが、原位置を留めるものはなく、図化できるようなものもみられなかった。



第5図 IIトレンチ実測図



第6図 Vトレンチ実測図

(2) 前方部・墳頂部の調査

I トレンチ (第9図、図版5)

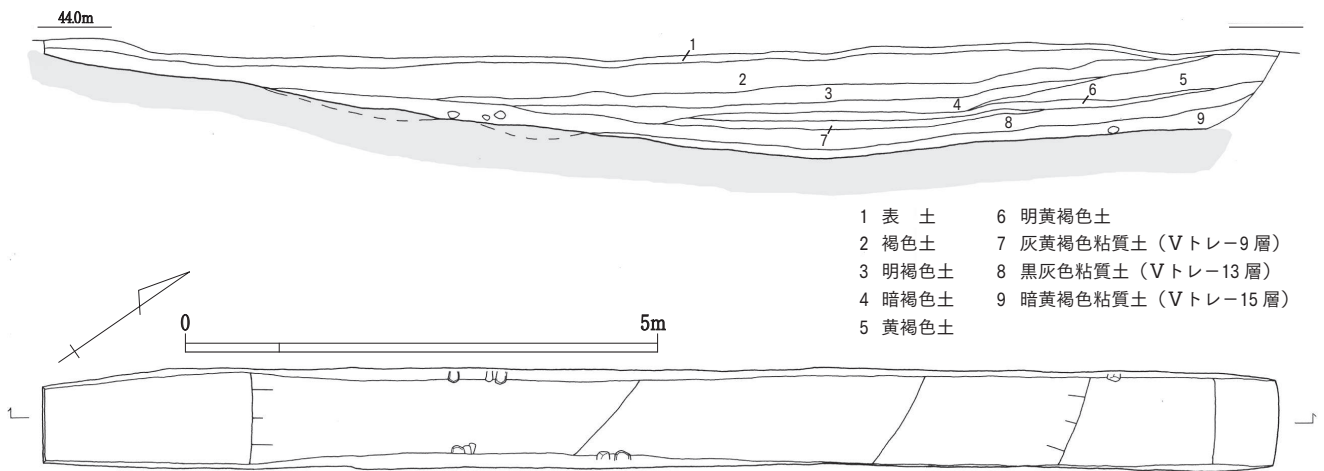
前方部南側に設けた調査区である。上段斜面と下段斜面共に下側部分の葦石が残存しており、基底石にはやや大振りの石材を用いている。上段のテラス面は標高約44.4mの地点で、明瞭ではないが幅約1.3mとなろう。また、墳裾は標高約42.7mの地点となる。後円部南側のⅢトレンチの状況と同様に、前方部南側においても墳裾前面にテラス状の平坦面を設けてさらにその下側を基壇状に地山を削り出している。本調査区からは、下段葦石付近からまとまって埴輪片が出土しているが、原位置を保つものはなく、墳頂部などから流れ落ちたものと思われる。

IV トレンチ (第10図、図版5)

前方部北側に設けた調査区である。上段斜面と下段斜面のそれぞれに葦石が残存していた。上段斜面は比較的全域に葦石が残存していたものの、遺存状況は良好ではなく基底石は剥離している。テラス面についても明瞭に遺存していないが標高約44.3mの地点となろう。下段斜面については下側部分の葦石が残存していた。基底石はやや大振りの石材を用いるが、南側と比較すると全体に小振りな印象である。墳裾は標高約43mの地点である。本調査区からは、「船」等の線刻がみられる朝顔形埴輪片が出土しており特筆されるが、出土状況から判断すると墳頂部から流れ落ちたものと思われる。また、小片ではあるが家形埴輪も1点出土している。

VII トレンチ (第11図、図版6)

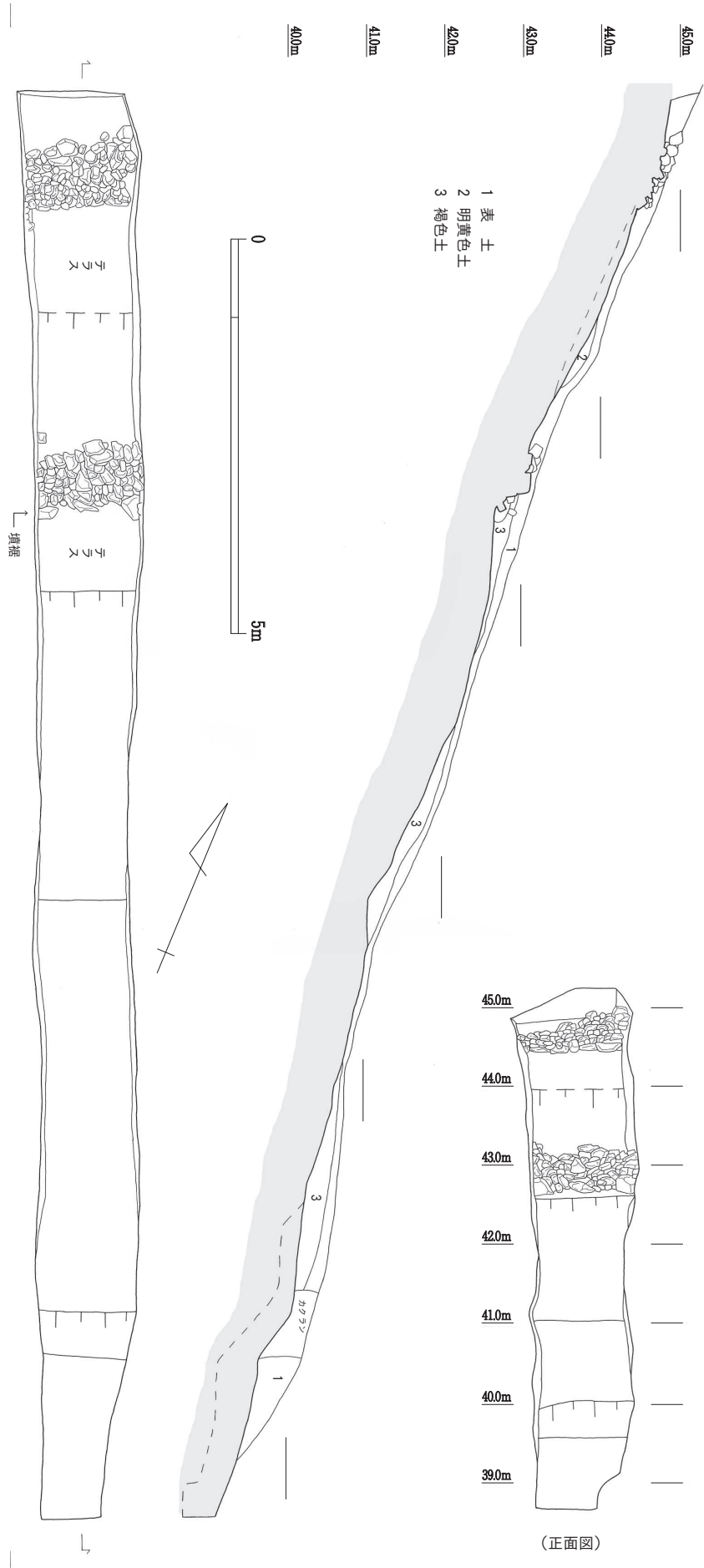
前方部南側にIトレンチと並行して設けた調査区である。上段斜面と下段斜面に葦石が一部残存していたが、基底石までが残るのは上段のみである。上段のテラス面は標高約44.4mの地点で、明瞭ではないが幅約0.5mとなろう。また、墳裾は標高約42.3mの地点となる。Iトレンチと同様に、墳裾前面にテラス状の平坦面を設けてその下側を基壇状に地山を削り出している。本調査区からも墳頂部から流れ落ちた埴輪片が一定量出土しており、家形埴輪片も1点含まれる。



第7図 VIトレンチ実測図

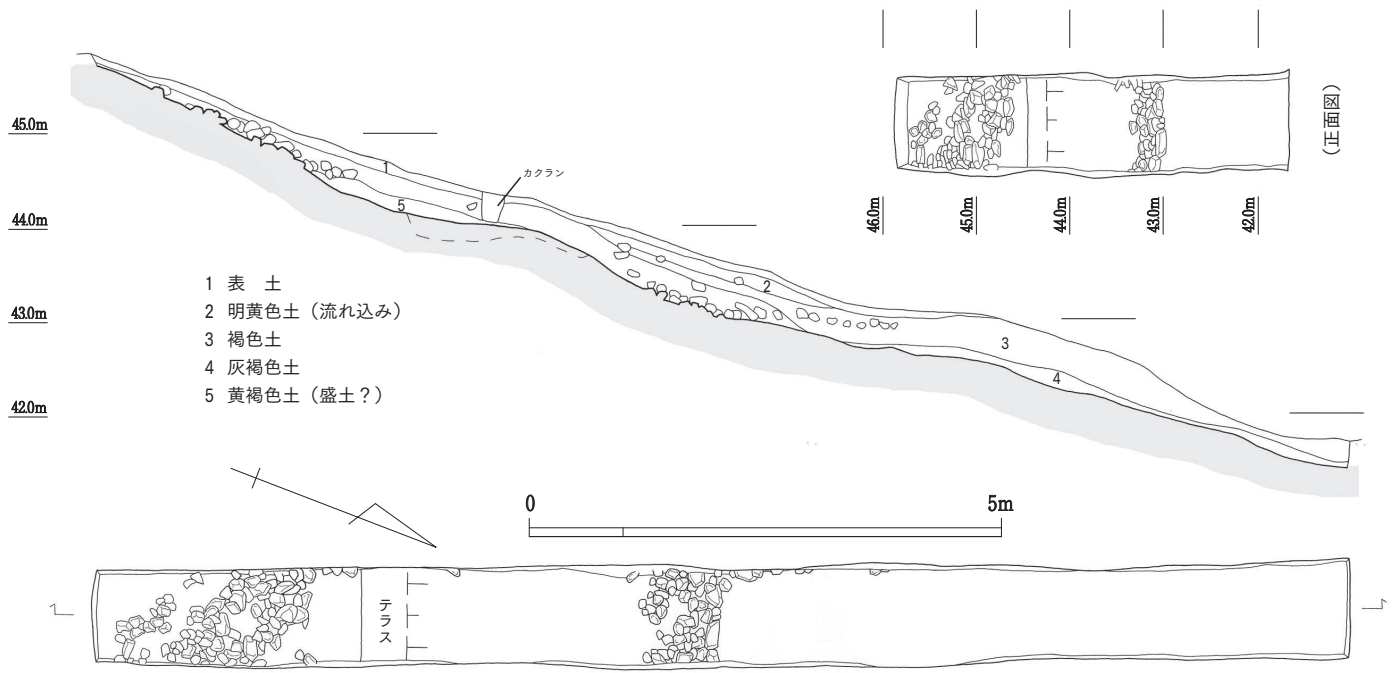


第8図 XIトレンチ実測図

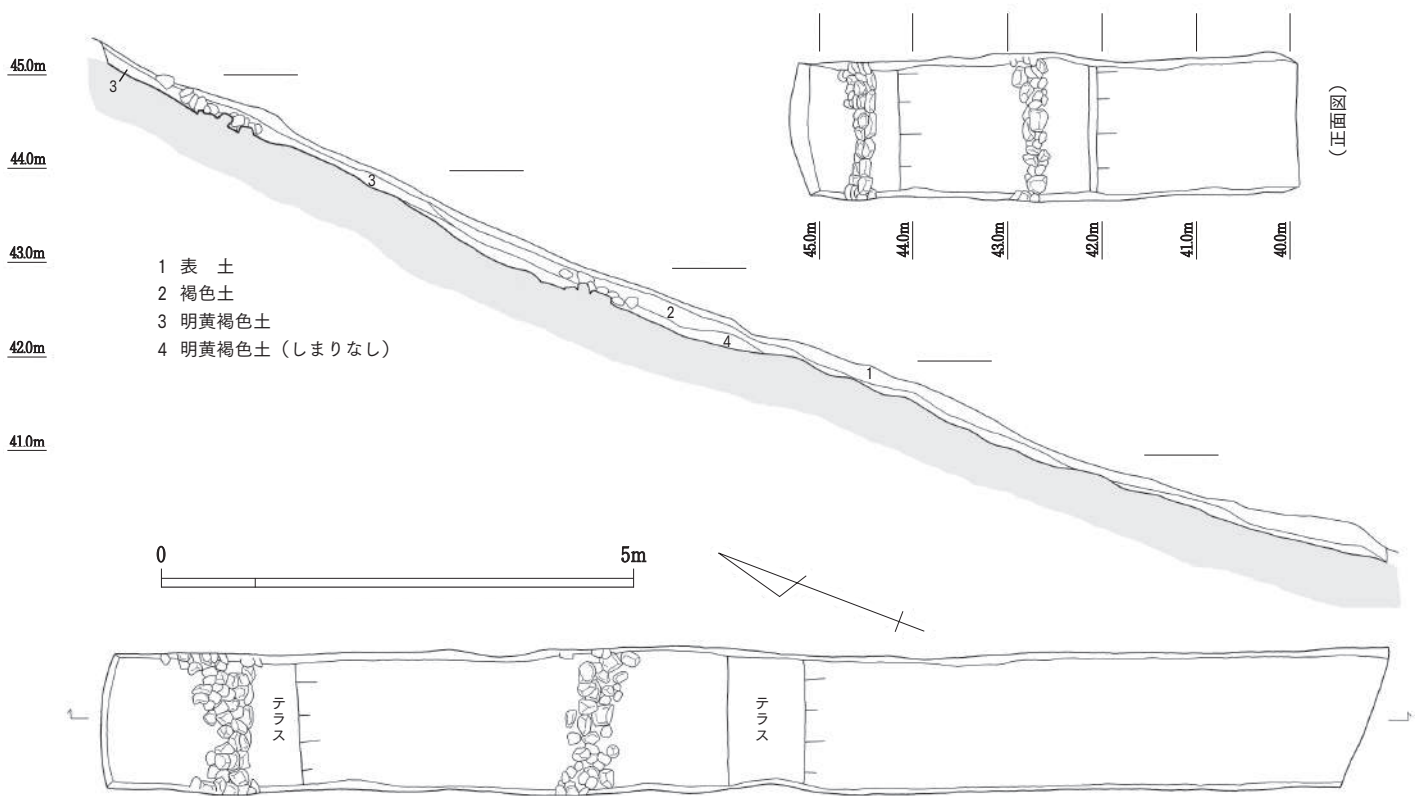


第9図 I トレンチ実測図





第 10 図 IVトレンチ実測図



第 11 図 VIIトレンチ実測図

### X トレンチ（第 12 図、図版 6）

墳頂部北側の後円部から前方部に設けた長さ約 39m の調査区である。前方部と後円部の境から後円部墳頂に至る標高約 48.2m 地点までの傾斜は緩やかで、第 4 章で考察しているように、スロープ状の施設が後円部に取り付くものと思われる。

後円部と前方部の境付近には後円部斜面から流れ落ちたと思われる葺石と原位置を保って壺形埴輪の底部片が検出されており、さらに壺形埴輪から西側へ約 2.8m の前方部墳頂の北側端で朝顔形埴輪 1 基が原位置に近い位置で検出されている。また、後円部の最上段頂部付近では、土師器の二重口縁壺（小型品）が出土している。

### （3）くびれ部の調査

#### IX トレンチ（第 12 図、図版 7・8）

北側くびれ部に設けた調査区で墳頂部の X トレンチと接続している。墳丘斜面の葺石の残存状況は必ずしも良好ではないものの、基底石は良好に遺存しておりくびれ部を確認することができた。上段の葺石を観察すると、基底石はやや大振りの石材を用いているが、斜面にも大振りの石材を横方向と縦方向に連続して用いているところがあり、明瞭ではないが区画石列を示すものと思われる。基底石列は標高約 44.9m、横位の区画石列は標高約 45.4m の地点でみられる。縦位の区画石列は後円部と前方部の境のほか、そこから前方部側へ約 2 m の地点と後円部側へ約 2 m の地点にも想定されよう。下段の葺石も上段と同様に基底石及び区画石列にはやや大振りの石材を用いている。基底石列は標高約 43.4m、横位の区画石列は標高約 43.9m の地点で、縦位の区画石列は後円部と前方部の境にみられるが、横位の区画石列を境に上下で方向が変わる。

埴輪の出土は原位置を留めるものではなく、基本的には墳頂部から流れ落ちたものと思われる。朝顔形埴輪、壺形埴輪の割合が相対的に高く円筒埴輪は少ない。

#### VIII トレンチ（第 13 図、図版 9・10）

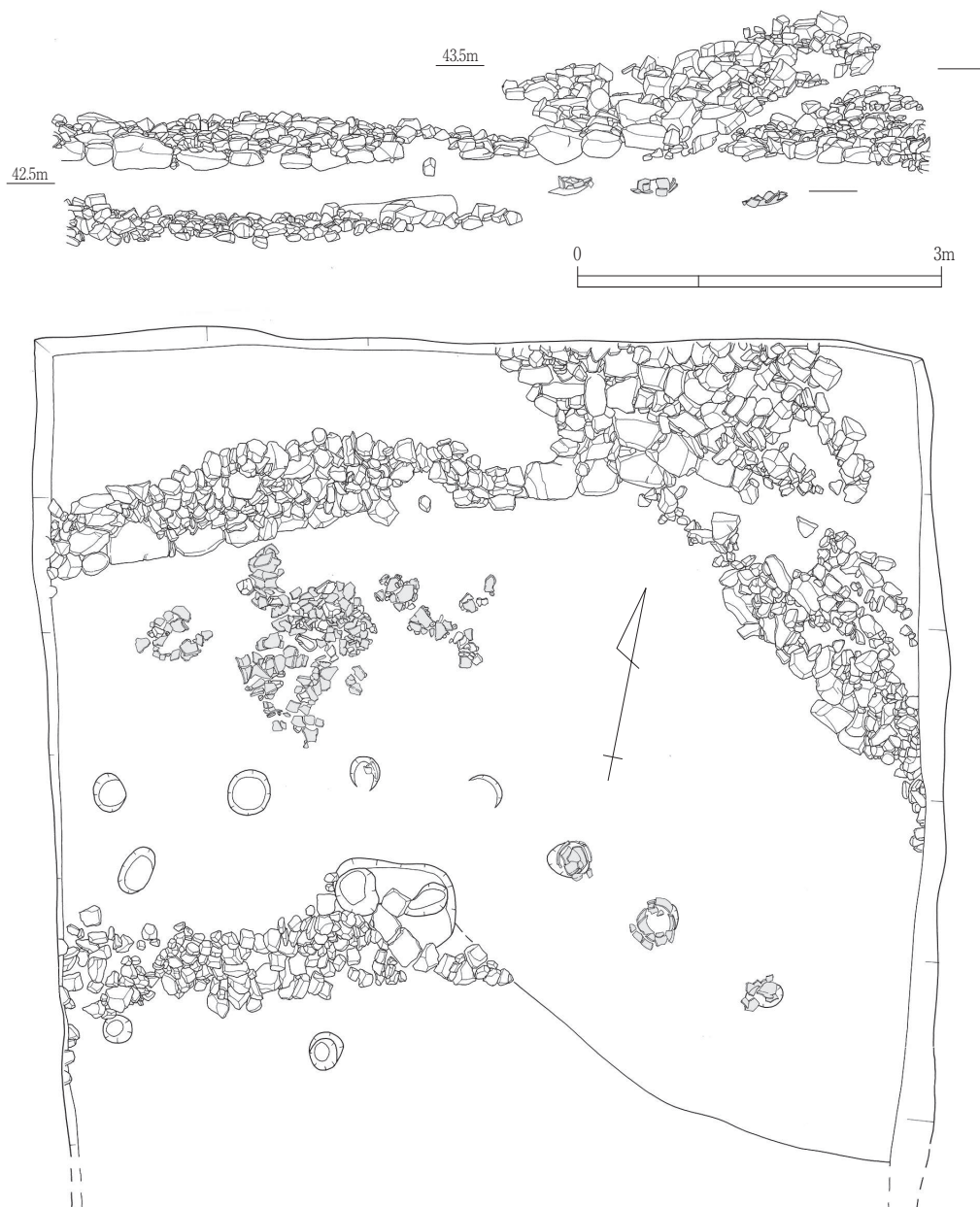
南側くびれ部に設けた調査区である。墳丘くびれ部下段の葺石と墳丘裾部で埴輪列が検出された。葺石は北側くびれ部と比較すると相対的に大振りの石材を用いており、基底石にその傾向は顕著である。斜面上の葺石の残存状況は良好ではないが、後円部と前方部の境には北側くびれ部と同様に縦位の区画石列がみられる。葺石の基底石列は標高約 42.7m の地点で、前面には幅 3 m 程のテラスを設けているが、墳裾にあたるこのテラス面からは約 0.9m 間隔の埴輪列が検出された。埴輪の底部片までが残存していたのは後円部側の 3 基であるが、ほぼ等間隔に並ぶ浅いピットの数から調査区内で少なくとも 7 基の埴輪が樹立していたものと推定される。底部が残存していた 3 基の埴輪は、東側から円筒形 2 基と朝顔形 1 基であった。

なお、埴輪列を挟んで北側の埴輪溜りは前方部墳頂の埴輪が流れ落ちたもの、南側の礫溜りは墳丘上の葺石が流れ落ちて堆積したものである。調査区からは、円筒形、朝顔形、壺形の埴輪が概ね均等な割合で出土している。

IX トレンチでは、VIII トレンチのような埴輪列は検出されておらず、北側と南側とでは葺石や埴輪の配置に差異が認められた。



第 12 図 IX・X トレンチ実測図



第13図 VIIIトレンチ実測図

### 3. 埋葬施設の補足調査

1次調査では埋葬施設の詳細な調査が実施され、規模と構造とが明らかになった。本調査では石棺の移設に伴い棺床部分の精査と追加記録を実施している。以下、1次調査成果の再掲と合わせて補足報告を行うこととする。

後円部には、刳拔式の舟形石棺を納めた主軸方位をN-25°-Wにとる竪穴式石室が設けられている(第14図)。石室は東壁が370cm、北壁が149cmを測り、長壁が短壁を挟む竪穴式石室としては特異な構造を有する。石室の四壁は割石小口積みを基本とし、遺存状況が比較的良い北側と西側の壁面立ち上がりの角度は83°を測る。石室の上部は天井石が残っておらず遺存状態も良く

ないが、東長壁北端の上面レベルを参考とすれば、床面から天井石までの高さは1.2mとなることが想定される。石室床面についてみると、床面の標高は約48mの地点で、構造は5～10cmの黄白色粘土を張りその上に10cm程の大きさの河原石を敷き詰めて礫床を形成する。棺を設置する中央には礫床の上にさらに黄白色粘土を台状に張り、石棺の安定化を図ったものと思われる。しかし、全体に攪乱が著しく礫床まで旧状を留めているのは鉄刀1振が原位置で出土した東壁南側付近と半裁された石棺が残存する部分のみであった。

石棺については、盗掘等による影響で原位置を保っていたのは棺身の北半部のみで、現存長169cmを測る。石室内には他に折損した蓋と身の一部が残存しており、棺身の長さ（縄掛突起を除く）240cm、高さ77cm、幅73cmに推定復元される。なお、石棺石材については、粗粒砂岩で1次調査報告書においては地元の砂岩と推定されているが、近年は佐賀県唐津湾沿岸の松浦砂岩とみる意見（高木1994）が主流である。

また、石室の四壁と床面及び石棺内には赤色顔料の痕跡が認められたが、近年の分析結果からは、石室内はベンガラ、石棺内には朱が用いられていることが判明している（志賀2008）。

## 4. 出土遺物

### （1）出土遺物の概要

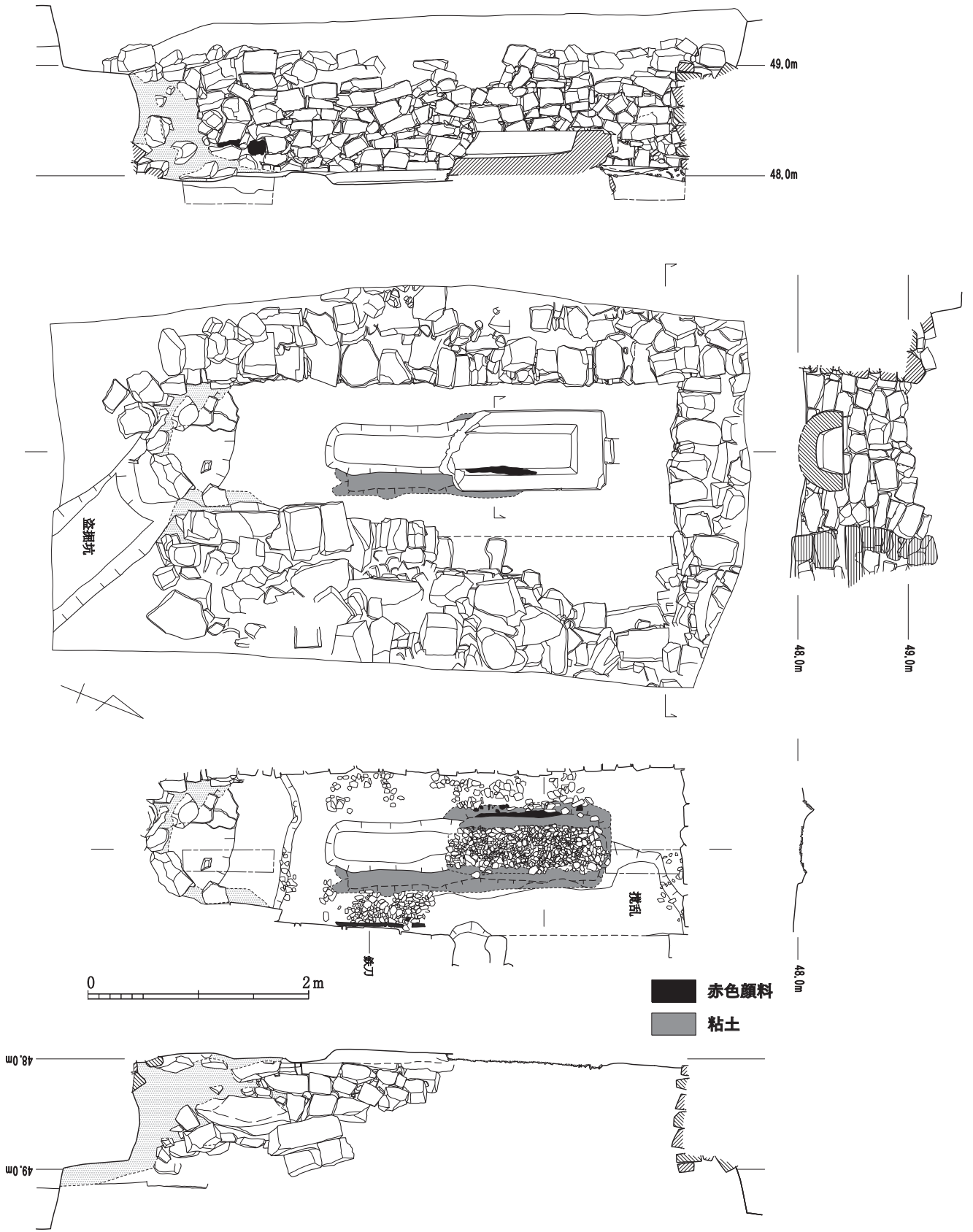
各調査区からの出土遺物の大半は埴輪片で、わずかに弥生土器、須恵器、土師器の破片が出土している。埴輪は1次調査と同様に円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪、家形埴輪の4種が出土しているが、1次調査と比較すると、家形埴輪は小片のみで数量も少ない。朝顔形埴輪については、線刻を施した埴輪が多く出土した。また、壺形埴輪については、二重口縁に加えて単口縁のものが新たに確認されたことは大きな成果と言えよう。埴輪の多くは破片となって墳頂部から流れ落ちた状況で出土しているが、墳頂部のⅩトレンチ、南側くびれ部のⅧトレンチでは、原位置を保って出土したものが少数みられた。特に南側くびれ部では墳裾前面に配置された埴輪列が出土し、墳頂部以外での配置が確認されたことは古墳祭祀を考える上で貴重な成果となった。

以下、個体ごとの特徴について詳述するが、胎土については、精粗の別はややみられるものの、基本的に砂粒を混ぜた在地の粘土を利用しているものと思われ、個別の記述は省略する。また、円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪については、本文と合わせて章末の遺物観察表も参照されたい。

### （2）後円部出土の遺物（第15図、図版11）

1はⅡトレンチから出土した円筒埴輪片である。口縁部から胴上部の破片で口縁部の復元径は30.4cm、長さは6.2cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄橙色をなし、口縁部に黒斑がみられる。器壁は薄く突帯断面は低い台形を呈する。調整は外面が粗目のタテハケで内面はタテハケ後ナデを施す。粘土帯の接合箇所には指オサエの跡が残る。

2はⅡトレンチから出土した円筒埴輪片で口縁部から胴上部を欠く。底部径は21.7cmで残存高は33.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄橙色をなし、一部に黒斑がみられる。器壁は薄く突帯断面は低い台形を呈する。調整は内外面共に粗目のタテハケを施す。現存箇所に透かし孔



第14図 堅穴式石室実測図

は確認できず、孔はもともと穿たれていないものと思われる。

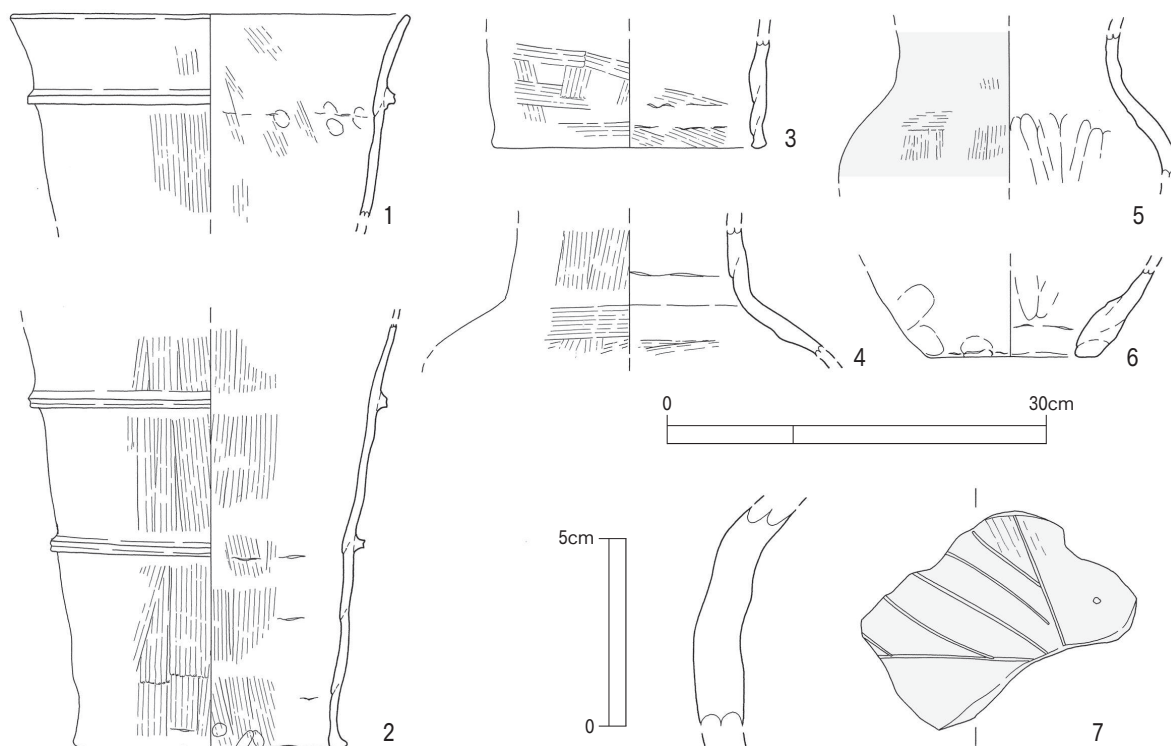
3はⅥトレンチから出土した円筒埴輪の底部片で復元径は21.8cmとなる。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなす。器壁はやや厚手で、外面調整は粗目のタテハケ後、2次調整のヨコハケ、内面調整は横斜めのハケ後、部分的にナデ消すが、粘土帯の接合痕は明瞭に残る。

4はⅢトレンチから出土した朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけての破片である。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、器壁は厚い。外面調整は、頸部に粗目のタテハケ後、部分的にヨコナデ、肩部にはタテハケ後ヨコハケを施す。内面は肩部にヨコハケがみられるが、基本的にナデ調整である。

5はⅡトレンチから出土した壺形埴輪の頸部から肩部にかけての破片である。焼成は良好で外面の色調は黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。外面調整はやや粗目のタテハケ後、肩部にはヨコハケないしは擦痕状のヨコナデを施す。内面調整は胴部から肩部にかけて縦方向の強い指ナデを施し、頸部はヨコナデを施す。

6はⅢトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で、復元径は13cmを測る。焼成は良好で外面の色調は黄橙色をなし、器壁は厚い。外面調整は粗目のハケ後ナデ、最後に板状工具等による押圧で面を整える。内面の底部はヨコナデとケズリ、胴部は縦方向の強い指ナデが施される。

7はⅢトレンチから出土した線刻が施された壺形もしくは朝顔形埴輪の頸部片である。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。



第15図 後円部出土の埴輪実測図

(3) 前方部出土の遺物 (第 16 ~ 18 図、図版 11 ~ 15)

8 はⅦトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部片である。口縁部の復元径は 30.8cm、長さは短く 4.6cm を測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、器壁は薄い。突帯断面は低い台形を呈するが、先端部はやや丸みを帯びる。調整は、外面にタテハケ、内面にナデがみられる。

9 はⅦトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部片である。口縁部の復元径は 33cm、長さは 5.6cm を測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄色をなし、器壁は薄い。突帯断面は低い台形を呈するが、先端部は丸みを帯びる。調整は外面にやや細目のヨコハケ、内面に粗目のタテハケがみられ、内外でハケメが異なる。

10 はⅣトレンチから出土した円筒埴輪片で全体のプロポーションがうかがえる資料である。口縁部の復元径は 35.3cm、長さは 6cm、底部径は 22.2cm、器高は 46.8cm を測る。焼成は良好で外面の色調は浅黄橙色をなし、一部に黒斑がみられる。口縁端部は板状工具等により丁寧に面を形成する。また、器壁は薄く突帯断面は低い台形を呈する。残存部状況から判断する限り、透かし孔はもともとなかったものと判断される。外面調整はタテハケ後、2次調整のヨコハケ、内面は後円部付近にハケメがみられるが、基本的にナデ調整である。また、底部及び粘土帯の接合部には指オサエの痕が密に残る。

11 はⅩトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部片である。口縁部の復元径は 34cm、長さは 5.2cm を測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、器壁は薄い。突帯断面は低い台形を呈するが、先端部は丸みを帯び三角形に近い。外面調整は粗目のタテハケ、内面調整は口縁部がナデ、胴部には粗目のハケメが残る。

12 はⅦトレンチから出土した円筒埴輪の胴部片で、最大径は復元で 31.8cm を測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄褐色をなし、器壁は薄い。突帯断面は低い台形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整はタテハケ後、部分的にナデを施す。また、接合部には部分的に指オサエの痕跡が残る。

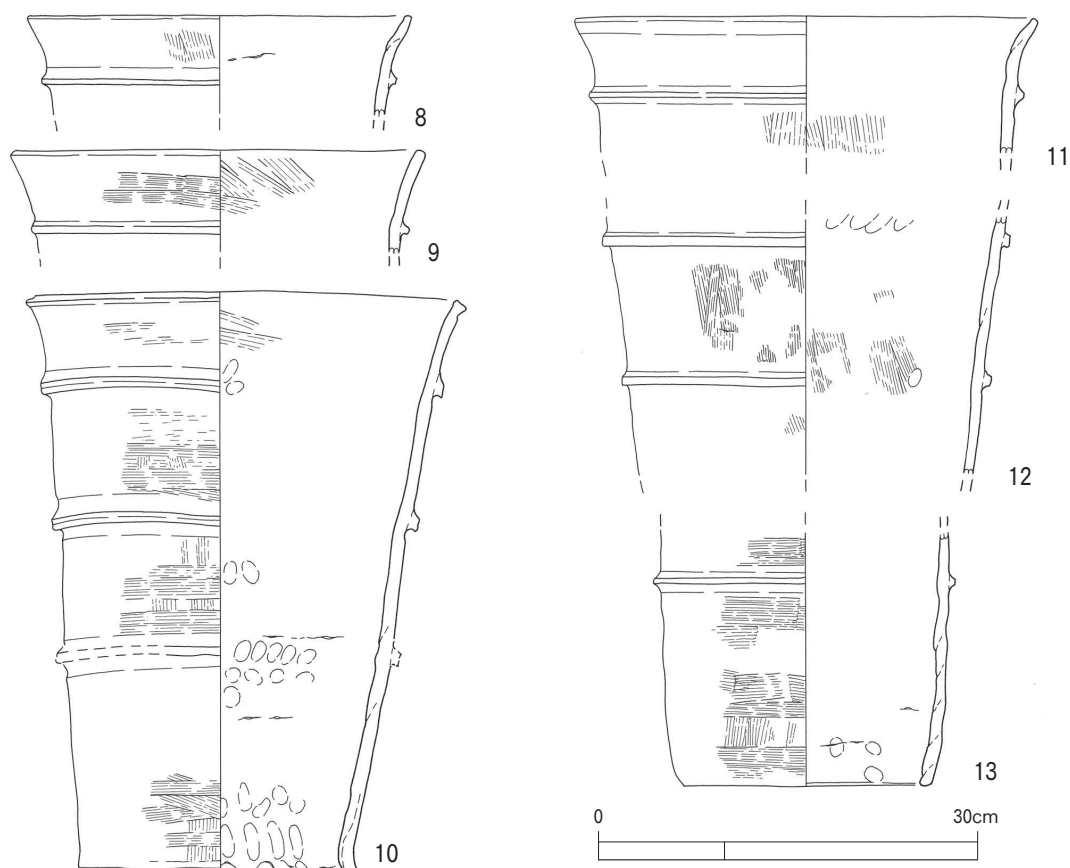
13 は整備工事時に前方部西側で採集した円筒埴輪の底部片で、復元径は 19.7cm を測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、一部に黒斑が残る。器壁は薄く、突帯断面は低い台形を呈する。外面調整はタテハケ後、2次調整のヨコハケ、内面はナデ調整で、粘土帯の接合箇所には部分的に指オサエの痕跡が残る。

14 はⅩトレンチから出土した朝顔形埴輪の口縁部片で、粘土接合箇所では剥離している。口縁部径は復元で 45.2cm、2次口縁の長さは 11.7cm を測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、器壁は厚い。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケ後ナデを施す。

15 はⅩトレンチから出土した朝顔形埴輪の口縁部片である。口縁部径は復元で 47.6cm、2次口縁の長さは 12.3cm を測る。口縁端部は面をなさずに丸みを帯びる。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、内外面に赤色顔料がみられる。器壁はやや薄い。外面調整は粗目のタテハケ後ヨコナデ、内面調整は擦痕状のヨコナデを施す。

16 はⅦトレンチから出土した朝顔形埴輪の口縁部片である。口縁部径は復元で 52.0cm、2次口





第16図 前方部出土の円筒埴輪実測図

縁の長さは13.4cmを測るが復元径については誤差を含む。口縁端部はしっかりと面をなしシャープな作りである。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、器壁は薄い。調整は内外面共に縦方向のハケを密に施す。

17はXトレンチから出土した朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけての破片で、頸部径は復元で16.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚く、頸部の突帯は鏝状に突出する。調整は外面に粗目のタテハケ、内面にナデがみられる。

18はXトレンチから出土した朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけての破片で、頸部径と胴部径は復元でそれぞれ16.2cmと26.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚く、突帯断面は高い台形を呈する。外面調整は粗目のタテハケ後、肩部にヨコハケ、内面調整は、ヨコナデを基本とし肩部には縦方向の強い指ナデを施す。肩部には詳細が不明であるが、「船」と思われるような線刻がみられる。

19はXトレンチから出土した朝顔形埴輪の肩部の小片で線刻がみられる。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、器壁は厚い。

20はIVトレンチから出土した線刻埴輪の小片である。朝顔形埴輪の頸部の可能性が高いが、壺形埴輪の可能性も残る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、器壁は厚い。

21はIVトレンチから出土した線刻埴輪の小片である。朝顔形埴輪の胴部で22、23と同一個体と

なるが、直接、接合はしない。線刻は透かし孔の上部に描かれている。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、器壁は厚い。

22 はⅣトレンチから出土した朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけての破片で、頸部径と胴部径は復元でそれぞれ 19.6cm と 29.4cm を測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚く、突帯断面は高い台形を呈する。外面調整は粗目のタテハケ後、肩部にヨコハケ、内面調整はハケを基本とし肩部には縦方向の強い指ナデを施す。肩部には準構造船を描いたと思われる比較的写実的な「船」の線刻がみられる。23 とは同一個体になるものと思われるが直接、接合はしない。

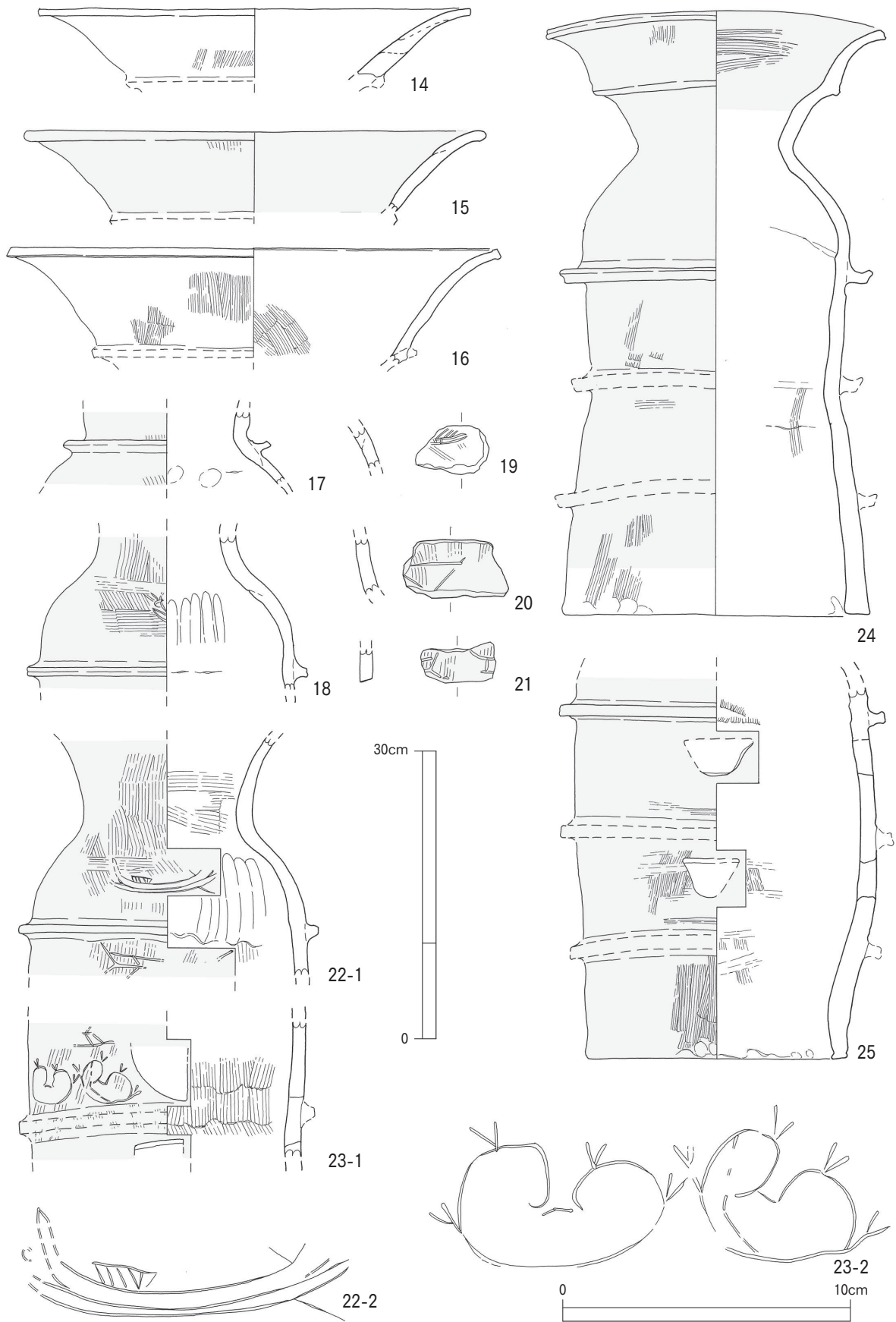
23 はⅣトレンチから出土した朝顔形埴輪の胴部片で弧帯文が退化したような線刻がみられる。胴部径は復元で 29.2cm を測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。内外面共に調整は粗目のタテハケを施した後、不定形な逆三角形の透かし孔を穿っている。また、突帯剥離面には、突帯設定のための縦長方形の刺突孔（5×8mm）が定間隔でみられる。22 とは同一個体になるものと思われるが直接、接合はしない。

24 はⅩトレンチから出土した朝顔形埴輪片でほぼ原位置から出土している。器高は 63.8cm、口縁部径は復元で 35.5cm、2 次口縁の長さは短く 7.2cm、底部径は復元で 32.8cm を測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面と口縁内面には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。外面調整は、細目のタテハケを基本とし部分的にヨコハケ又は擦痕状のヨコナデを施す。内面調整は、胴部に部分的にタテハケが残るがナデ調整を基本とするものと思われる。また、口縁部内面はヨコハケを施すが外面のハケメより粗目の原体を使用している。突帯は上段のみに残存し、鐙状に突出した形状を呈する。残存状況から判断して透かし孔はもともとなかったものと思われる。

25 はⅠトレンチから出土した朝顔形埴輪の胴部から底部にかけての破片である。胴部最大径は復元で 31.6cm、底部径は 27.5cm を測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。外面調整は細目のタテハケ後、部分的に擦痕状のヨコナデ又はヨコハケを施す。内面調整は部分的にタテハケが残るがナデ調整を基本とするものと思われる。逆三角形ないしは逆台形の透かし孔が 2 段目と 3 段目に穿たれている。突帯は上段のみに残存し、24 ほどではないが鐙状に突出した形状を呈する。また、突帯が剥離した面には、突帯設定のための横長方形の刺突痕（9×6mm）が定間隔でみられる。

26 はⅩトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪の口縁部片で、口縁部径は復元で 26.8cm、2 次口縁の長さは 6cm を測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。内外面共に調整は粗目のタテハケ後、擦痕状のナデを施し、内面の 1 次口縁と 2 次口縁の境にはさらに強いヨコナデを施す。

27 はⅠトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の口縁部片である。口縁部径は復元で 32.4cm、2 次口縁の長さは 7cm を測る。焼成は良好で外面の色調は明赤褐色をなし、内面には赤色顔料がみられる。表面は摩滅が著しいが、外面調整はナデ仕上げ、内面調整は板状工具による擦痕状のナデである。



第17図 前方部出土の朝顔形埴輪実測図

28はXトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪(もしくは朝顔形埴輪)の口縁部片である。口縁部径は復元で34.4cm、2次口縁の長さは8.3cmを測る。焼成は良好で外面の色調は褐灰色をなし、外面には赤色顔料がみられる。内外面共に調整はやや粗目のヨコハケ後ヨコナデを施し、内面の1次口縁と2次口縁の境にはさらに強いヨコナデを施す。

29はIVトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪(もしくは朝顔形埴輪)の口縁部片である。口縁部径は復元で31.6cm、2次口縁の長さは9.2cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、内外面には赤色顔料がみられる。外面調整は粗目のタテハケ後、部分的に擦痕状のヨコナデを施している。内面調整はタテハケ後、上部はナデ仕上げとしている。

30はIVトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪(もしくは朝顔形埴輪)の頸部片で、最小径は復元で17.2cmである。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、外面と内面上部には赤色顔料がみられる。表面は摩滅していて詳細は不明であるが、外面調整は頸部に粗目のタテハケ、内面調整は頸部に粗目のヨコハケがみられる。

31はVIIトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪の頸部片で、最小径は復元で9.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は薄い。内外面共にナデ調整がみられる。突帯は薄手で錨状に突出する。

32はIトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪(もしくは朝顔形埴輪)の頸部片で、最小径は復元で14cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。表面は摩滅していて詳細は不明であるが、調整は外面頸部にハケ、内面にナデがみられる。

33は整備工事時に前方部で採集した二重口縁の壺形埴輪(もしくは朝顔形埴輪)の口縁部片で、復元径は32.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい赤褐色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整はタテハケ後、板状工具による擦痕状のナデ、内面調整はナデが施される。

34はVIIトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪(もしくは朝顔形埴輪)の1次口縁部から肩部にかけての破片で、頸部の最小径は復元で14.4cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。外面調整はタテハケ後ヨコナデ、内面調整はナデ仕上げとしている。

35はVIIトレンチから出土した壺形埴輪の頸部から胴部にかけての破片で、頸部の最小径は復元で10.4cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は壺形埴輪の中では薄手である。外面調整は胴部にやや粗目のタテハケ、肩部から頸部にかけては擦痕状のヨコナデ、内面調整は胴部に横方向のケズリを施す。

36はXトレンチから出土した単口縁の壺形埴輪の口縁部片である。口縁部径は復元で20.2cm、頸部径は復元で15.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなす。外面調整はやや粗目のヨコハケ後ヨコナデ、内面調整はナデ仕上げとしている。

37はIVトレンチから出土した単口縁の壺形埴輪で口縁部から胴部半分が残存する。口縁部径は復元で26.6cm、頸部径は復元で13.3cm、胴部最大径は上位にあり復元で29.0cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面及び内面の口縁部には赤色顔料がみられる。器壁は

厚い。外面調整は、胴部にやや粗目のタテハケ、口縁部から肩部にかけてはタテハケ後、擦痕状のナデを施す。内面調整は、胴部についてはケズリ、口縁部から頸部についてはタテハケ後、擦痕状のナデを施す。

38はⅣトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で復元径は11.0cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなす。外面調整は、やや粗目のタテハケ後、下半はナデを施す。内面調整はケズリ、端部もケズリにより面取りする。

39はⅠトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で復元径は16.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなす。外面調整は、タテハケ後、下半には板状工具等による押圧を施す。内面調整は胴部に縦方向の指ナデ、底部に指オサエ、端部はケズリにより面取りする。

40はⅦトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で復元径は14.1cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は、粗目のタテハケ後、下半には板状工具等による押圧、内面調整は強い指ナデを施す。

41はⅠトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で復元径は17.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなす。外面調整は不明、内面は指オサエの痕が密に残る。端部をわずかに屈曲させる。

42はⅩトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で復元径は15.0cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は斜め方向の粗目のタテハケ、内面調整は、胴部に粗いケズリ、底部については粘土の補強を行い指オサエ、端部はケズリにより面取りする。

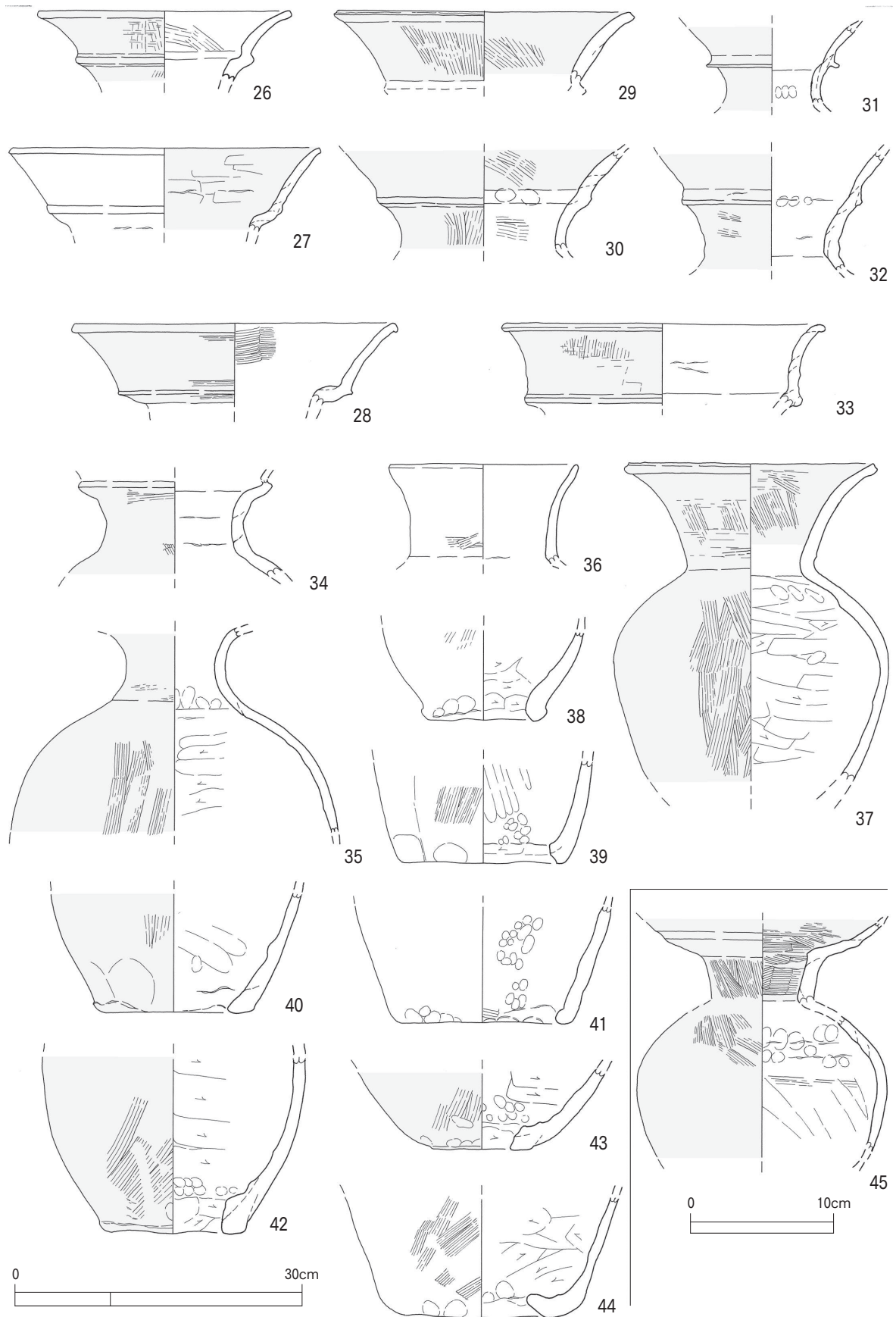
43はⅩトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で復元径は10.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調は褐灰色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は斜め方向の粗目のタテハケ、内面調整は、胴部に粗いケズリ、底部については粘土の補強を行い指オサエ、端部はケズリにより面取りする。

44はⅦトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で復元径は16.0cmを測る。焼成は良好で外面の色調は黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は斜め方向のやや粗目のタテハケ後、部分的にナデ、内面調整は粗いケズリを施し、端部を内側に屈曲させる。

45はⅩトレンチから出土した二重口縁の土師器壺で、頸部から口縁下部にかけてと胴部の半分が残存するが接合はしない。頸部最小径は7.1cm、胴部最大径は上位にあり復元で17.4cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなし、外面及び口頸部内面には赤色顔料がみられる。外面調整はハケ後ナデ消し、肩部から頸部にかけてはタテハケが残る。内面調整は、胴部下半にケズリ、胴部上半に指オサエとナデ、口頸部にヨコハケを密に施す。

#### (4) くびれ部出土の遺物(第19～21図、図版16～20)

46はⅨトレンチから出土した単口縁の壺形埴輪の口縁部片である。口縁部径は復元で26.2cm、頸部径は復元で15.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなす。表面は摩滅しており調整の詳細は不明であるが、内外面共に粗目のタテハケがみられる。



第 18 図 前方部出土の壺形・朝顔形埴輪、土師器実測図

47はⅨトレンチから出土した単口縁の壺形埴輪の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部径は復元で22.8cm、頸部径は復元で16.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい褐色をなし、肩部に黒斑がみられる。表面は摩滅しており調整の詳細は不明であるが、外面はやや粗目のタテハケ後、擦痕状のヨコナデ、内面はナデがみられる。

48はⅨトレンチから出土した単口縁の壺形埴輪の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部径は復元で21.6cm、頸部径は復元で14.2cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなす。外面調整はタテハケ後、肩部にはヨコハケを施す。内面調整は、胴部に縦方向の強い指ナデ、頸部付近にヨコハケ、口縁部にナデを施す。

49はⅨトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の1次口縁部から肩部にかけての破片で、頸部の最小径は復元で16.1cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなす。外面調整はタテハケ、内面調整はナデを施す。1次口縁と2次口縁との剥離面には刺突痕が残る。

50はⅨトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の1次口縁部から頸部にかけての破片で、頸部の最小径は復元で19.1cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。外面調整は粗目のタテハケ、内面調整はナデを施す。1次口縁と2次口縁との剥離面には49のような刺突痕はみられない。

51はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の頸部から胴部にかけての破片で、頸部の最小径は復元で16cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなす。外面調整は細目のタテハケ、内面調整は胴部に縦方向の強い指ナデ、頸部にはナデを施す。

52はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の頸部から胴部にかけての破片で、頸部の最小径は復元で16cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、胴部には黒斑がみられる。器壁は薄い。外面調整はタテハケ後、肩部には部分的に斜め方向のハケを施す。内面には指オサエの痕が密に残る。

53はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の肩部から底部にかけての破片で、胴部の最大径は中位よりやや上にあり30.7cm、底部径は13.7cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、器壁は薄い。外面調整は、胴部上半から肩部にかけてはタテハケ、底部については板状工具等の押圧による整形がみられる。内面調整はナデ、胴部上半から肩部には指オサエを密に施し、底部端部はナデ、部分的にケズリで面取りする。

54はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で、底部径は17.5cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、器壁は薄い。外面調整は摩滅により詳細は不明、内面調整は縦方向の強い指ナデを密に施す。

55はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で、底部径は11.4cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなす。外面調整はタテハケがみられるが、摩滅により詳細は不明、内面調整は縦方向の強い指ナデを密に施す。

56はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で、底部径は13.5cmを測る。焼成は良好で外面

の色調は明黄褐色をなす。外面調整は、タテハケ、底部については板状工具等の押圧による整形がみられる。内面調整はナデ、指オサエを密に施す。

57はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で、底部径は14cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなす。外面調整はやや細目のタテハケがみられるが、摩滅により詳細は不明、内面調整は縦方向のケズリを胴部に施し、底部端部はナデ、部分的にケズリで面取りする。

58はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で、底部径は12.7cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなす。外面調整は粗目のタテハケ、底部については板状工具等の押圧による整形がみられる。内面調整はナデ、部分的に指オサエを施す。

59はⅨトレンチから出土した壺形埴輪の底部片で、底部径は15cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなす。外面調整はタテハケがみられるが詳細は不明、内面調整はナデ、部分的に指オサエを施す。

60はⅨトレンチから出土した朝顔形埴輪の口縁部片である。口縁部径は復元で38cm、2次口縁の長さは9.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄色をなし、器壁は薄い。外面調整はやや細目のタテハケ後、下半はヨコナデと思われるが詳細は不明、内面調整は摩滅により不明である。

61はⅨトレンチから出土した朝顔形埴輪の口縁部片である。口縁部径は復元で40.2cm、2次口縁の長さは8.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は斜め方向のハケ後、下半はヨコナデ、内面調整はナデを施す。

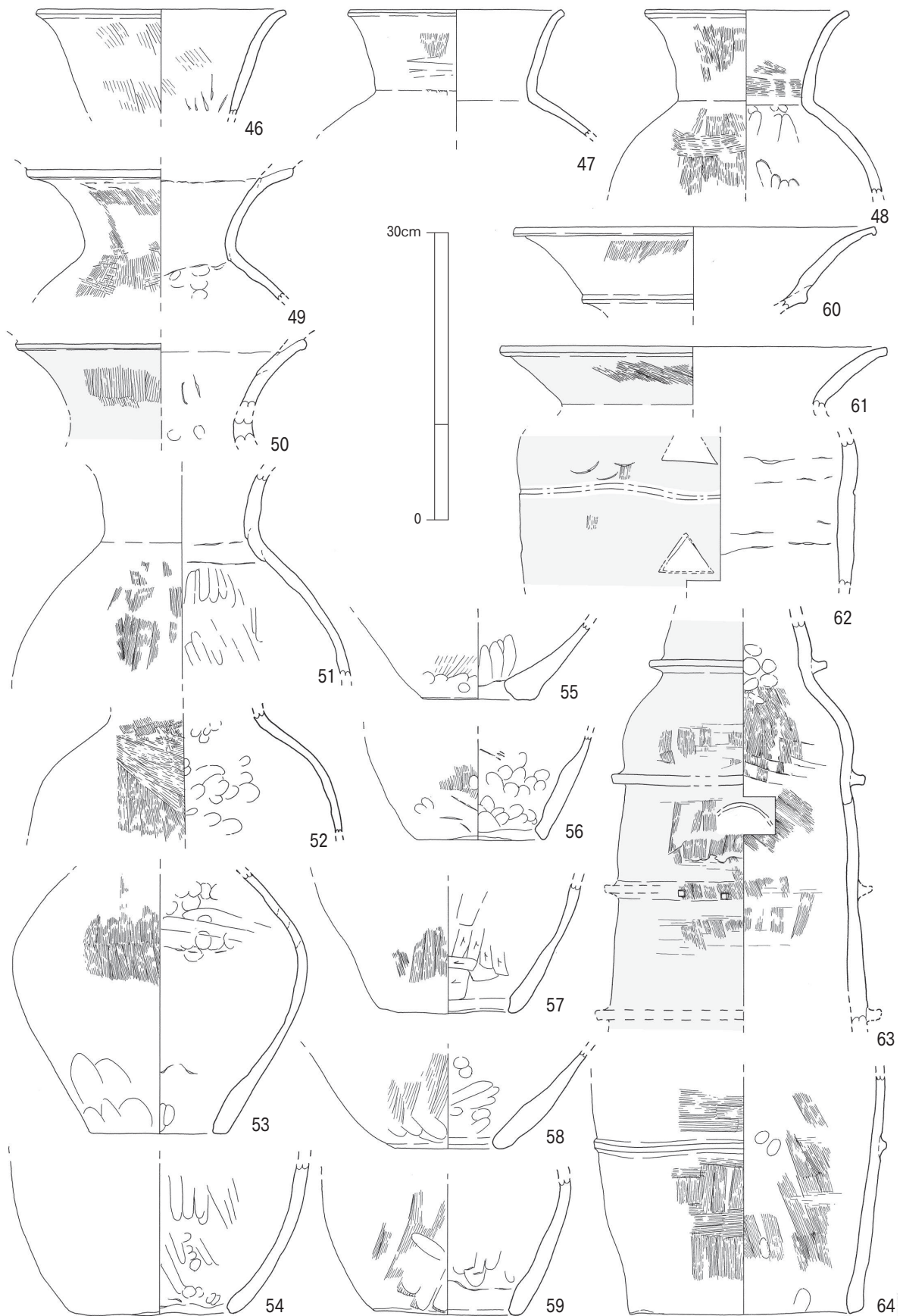
62はⅨトレンチから出土した朝顔形埴輪の胴部片で復元径は35.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整はやや細目のタテハケ後、部分的にヨコナデと思われるが詳細は不明、内面調整はナデと思われるが摩滅により詳細は不明である。透かし孔は三角形で、突帯剥離面には突帯設定のための沈線がみられる。

63はⅨトレンチから出土した朝顔形埴輪の頸部から胴部片で底部を欠く。頸部最小径は復元で14cm、肩部最大径は復元で24.3cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は、胴部は細目のタテハケ後、部分的にヨコナデ、肩部から頸部にかけてはナデを密に施す。内面調整は、胴部についてはタテハケを基本とし、頸部については、ナデと指オサエを密に施す。透かし孔は上部がわずかに残存しており、半円形の可能性が考えられる。突帯は鐙状に突出する形状を呈し、突帯剥離面には突帯設定のための方形の刺突痕(8×8mm)がみられる。

64はⅨトレンチから出土した円筒埴輪(もしくは朝顔形埴輪)の胴部から底部の破片で、底部径は24.5cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には黒斑がみられる。器壁は薄く突帯断面は低い台形を呈する。外面調整は細目のタテハケ後ヨコハケ、内面調整は細目のタテハケ後、部分的にヨコナデを施す。

65はⅧトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部片で、口縁部の復元径は31.2cm、長さは8.3cmを測る。口縁端部はわずかに摩滅しており、旧状を留めていない。焼成は良好で外面の色調はに





第 19 図 北側くびれ部出土の埴輪実測図

ぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。器壁はやや厚い。外面調整は細目のタテハケ後、部分的にヨコナデを施し、内面調整はタテハケ後、密にヨコナデを施す。内外ではハケメが異なる。突帯は鏝状に突出する形状を呈する。

66はⅧトレンチから出土した円筒埴輪の破片で底部端部を欠く。口縁部の復元径は28.6cm、長さは5.7cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなし、器壁はやや厚い。外面調整は、粗目のタテハケ後、部分的に2次調整のヨコハケ、口縁部には密にヨコハケを施す。内面調整は、粗目のタテハケ後、部分的にヨコナデ、口縁部には外面と同様にヨコハケを施す。透かし孔は逆三角形で、突帯はシャープな台形を呈する。

67はⅧトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部から胴部の破片で、口縁部の直径は36.6cm、長さは5.2cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、器壁は薄い。外面調整は、タテハケ後、部分的に2次調整の細目のヨコハケ、口縁部にはタテハケ後、密にヨコナデを施す。内面調整は、タテハケ後、部分的にヨコナデ、口縁部には外面と同様にヨコナデを施す。透かし孔は無く、突帯は低い台形を呈する。

68はⅧトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部から胴部の破片で、口縁部の直径は33.5cm、長さは5.5cmを測る。焼成は良好で外面の色調は浅黄橙色をなし、外面には黒斑がみられる。器壁はやや厚い。外面調整は、タテハケ後、部分的にヨコハケ、口縁部にはタテハケ後、密に擦痕状のヨコナデを施す。内面調整は、基本的にナデを施すが、部分的にタテハケがみられる。透かし孔は逆三角形で、突帯は低い台形を呈する。

69はⅧトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部片で長さは5.3cmを測る。焼成は良好で外面の色調は黄橙色をなす。外面調整はタテハケ後ヨコナデ、内面調整はナデ、指オサエがみられる。

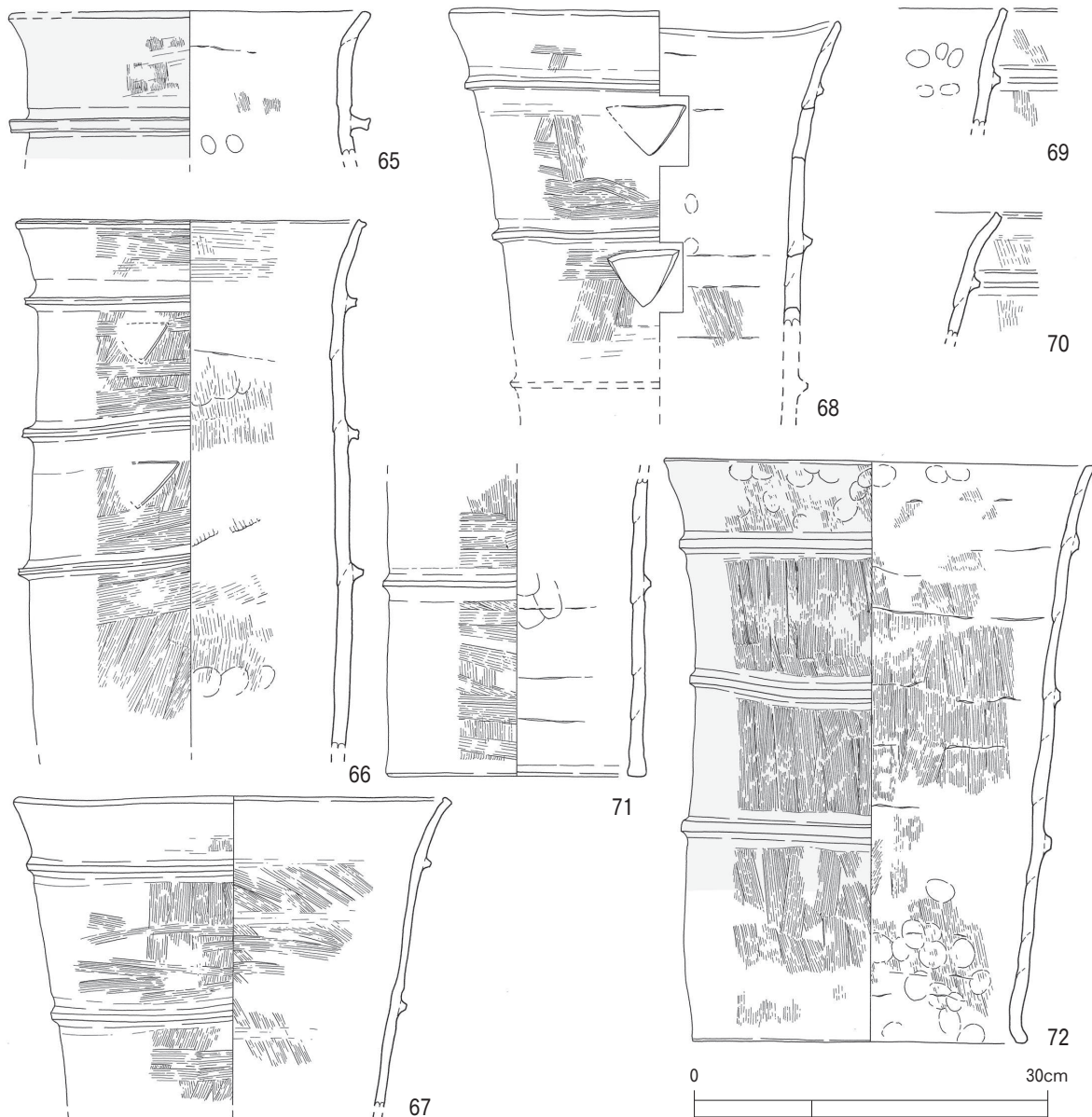
70はⅧトレンチから出土した円筒埴輪の口縁部片で長さは5.7cmを測る。焼成は良好で外面の色調は浅黄橙色をなす。外面調整はタテハケ後、端部にヨコナデ、内面調整はナデを施す。

71はⅧトレンチから出土した円筒埴輪の胴部から底部の破片で、底部の復元径は21.8cmを測る。焼成は良好で外面の色調は明黄褐色をなす。外面調整は粗目のタテハケ後、部分的に2次調整のヨコハケ、内面調整はナデを施す。突帯は低い台形を呈する。

72はⅧトレンチから出土した円筒埴輪ではほぼ完形に復元でき、口縁部径は36.5cm、口縁部の長さは5.6cm、底部径は28.3cm、器高は49.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料、黒斑がみられる。器壁は薄い。外面調整はタテハケを基本とし口縁部には指オサエがみられる。内面調整はタテハケ後、部分的にヨコナデを施す。透かし孔は無く、突帯は低い台形を呈する。

73はⅧトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の口縁部から頸部の破片である。口縁部径は復元で35.2cm、2次口縁の長さは7.8cm、頸部最小径は復元で17.7cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。内外面共に調整はナデ仕上げである。2次口縁部には線刻がみられる。

74はⅧトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の口縁部から頸部の



第20図 南側くびれ部出土の円筒埴輪実測図

破片である。口縁部径は復元で30.9cm、2次口縁の長さは6.6cm、頸部最小径は復元で16.3cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、口縁部内外面には赤色顔料がみられる。外面調整は粗目のタテハケ後、口縁部はヨコナデ、内面調整は、頸部にヨコハケ、口縁部にヨコナデを施す。

75はⅧトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の口縁部から頸部の破片である。口縁部径は復元で31.4cm、2次口縁の長さは5.7cm、頸部最小径は復元で16.5cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、内外面には赤色顔料がみられる。外面調整は粗目のタテハケ後、口縁部は擦痕状のヨコナデ、内面調整もタテハケ後ヨコナデを施すが、ハケメは内外で異なる。

76はⅧトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪の口縁部から肩部の破片で、頸部最小径は復元で14.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整はタテハケ後、擦痕状のヨコナデ、内面調整はヨコナデを施す。

77はⅧトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪の口縁部から肩部の破片で、頸部最小径は復元で13.3cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなす。外面調整はやや細目のタテハケ後、口縁部は擦痕状のヨコナデ、内面調整もタテハケ後ヨコナデを施すが、ハケメは内外で異なる。

78はⅧトレンチから出土した朝顔形埴輪の口縁部片である。口縁部径は復元で55.6cm、2次口縁の長さは13.9cmを測るが復元径については誤差を含む。口縁端部はしっかりと面をなしシャープな作りである。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、器壁は薄い。外面調整はタテハケ後、部分的にヨコナデ、内面調整は斜め方向のハケを密に施す。

79はⅧトレンチから出土した朝顔形埴輪の頸部から胴部にかけての破片である。頸部最小径は復元で21.8cm、肩部最大径は復元で32.5cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は、肩部から胴部は粗目のタテハケ後、部分的にヨコナデ、頸部はナデを密に施す。内面調整は、部分的にハケメを残すがナデと指オサエを密に施す。透かし孔は逆三角形で、突帯断面は高い台形を呈する。

80はⅧトレンチから出土した壺形埴輪の肩部から胴部の破片で、胴部最大径は29.6cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は、粗目のタテハケ後、肩部にはヨコハケ又はヨコナデを施す。内面調整はケズリを施す。肩部と胴部には線刻がみられる。

81はⅧトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の頸部から胴部にかけての破片である。2次口縁は早い段階で剥離しており、1次口縁の擬口縁がみられる。頸部最小径は復元で15cm、胴部最大径は復元で30.3cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は、粗目のタテハケ後、頸部にはヨコナデを施す。内面調整は、胴部に縦方向の強い指ナデ、頸部に粗目のヨコハケを施す。

82はⅧトレンチから出土した朝顔形埴輪の胴部片で、線刻を施す。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は、タテハケ後、部分的にヨコナデ、内面調整は細目のヨコハケ後、部分的にナデを施す。線刻の左側には逆三角形の透かし孔の一辺が残る。

83はⅧトレンチから出土した二重口縁の壺形埴輪で完形に復元できる。口縁部径は32.9cm、頸部最小径は14.9cm、胴部最大径は32.3cm、底部径は14.3cm、器高は46.2cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなし、外面及び内面口縁部には赤色顔料がみられる。器壁は厚い。外面調整はタテハケ後、口縁部から頸部にかけてはヨコナデを施す。胴部下半と胴部上半、頸部ではそれぞれハケメの方向が異なる。内面調整は、胴部に横方向のケズリ、頸部にヨコハケ、口縁部にタテハケ後ヨコナデを施し、底部端部は指オサエにより整える。胴部下半と上半とでケズリ

の方向が異なる。

84はⅧトレンチから出土した壺形埴輪の胴部から底部の破片で、底部径は13.3cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい橙色をなす。外面調整は粗目のタテハケ後、下半は板状工具等による押圧で整形する。内面調整は、胴部上半に縦方向の強い指ナデ、胴部下半に横方向のケズリ、底部に指オサエ、端部はケズリにより面取りする。

85はⅧトレンチから出土した壺形埴輪の肩部から底部の破片である。底部の復元径は10cm、胴部最大径は復元で26.1cmを測る。焼成は良好で外面の色調は橙色をなす。外面調整はやや粗目のタテハケ後、下半は板状工具等による押圧を部分的に施す。内面調整は、肩部に擦痕状のナデ、胴部にケズリ又は部分的に指ナデを施し、底部は指ナデ、端部は指オサエにより整える。

86はⅧトレンチから出土した壺形埴輪の肩部から底部の破片である。底部の復元径は15cm、胴部最大径は復元で28.1cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には黒斑がみられる。外面調整は摩滅により詳細不明であるが、下半は板状工具等による押圧が部分的にみられる。内面調整は、胴部上半にケズリ、胴部下半に縦方向の指ナデ、指オサエを施し、底部端部はケズリにより面取りする。

87はⅧトレンチから出土した朝顔形埴輪の胴部から底部の破片で、底部径は25cmを測る。焼成は良好で外面の色調はにぶい黄橙色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整は細目のタテハケを密に施すが、上半と下半とでハケメの方向が異なる。内面調整は、タテハケ後、縦方向の強い指ナデを施す。

88はⅧトレンチから出土した壺形埴輪の肩部から底部の破片である。底部の復元径は20cm、胴部最大径は復元で29.6cmを測る。焼成はやや軟質で外面の色調は明黄褐色をなし、外面には赤色顔料がみられる。外面調整はやや粗目のタテハケ後、肩部にヨコハケ、胴部下半には板状工具等による押圧を部分的に施す。内面調整は、肩部にナデ、胴部に縦方向の強い指ナデを施し、底部端部を内側に屈曲させる。

#### (5) 家形埴輪 (第22図)

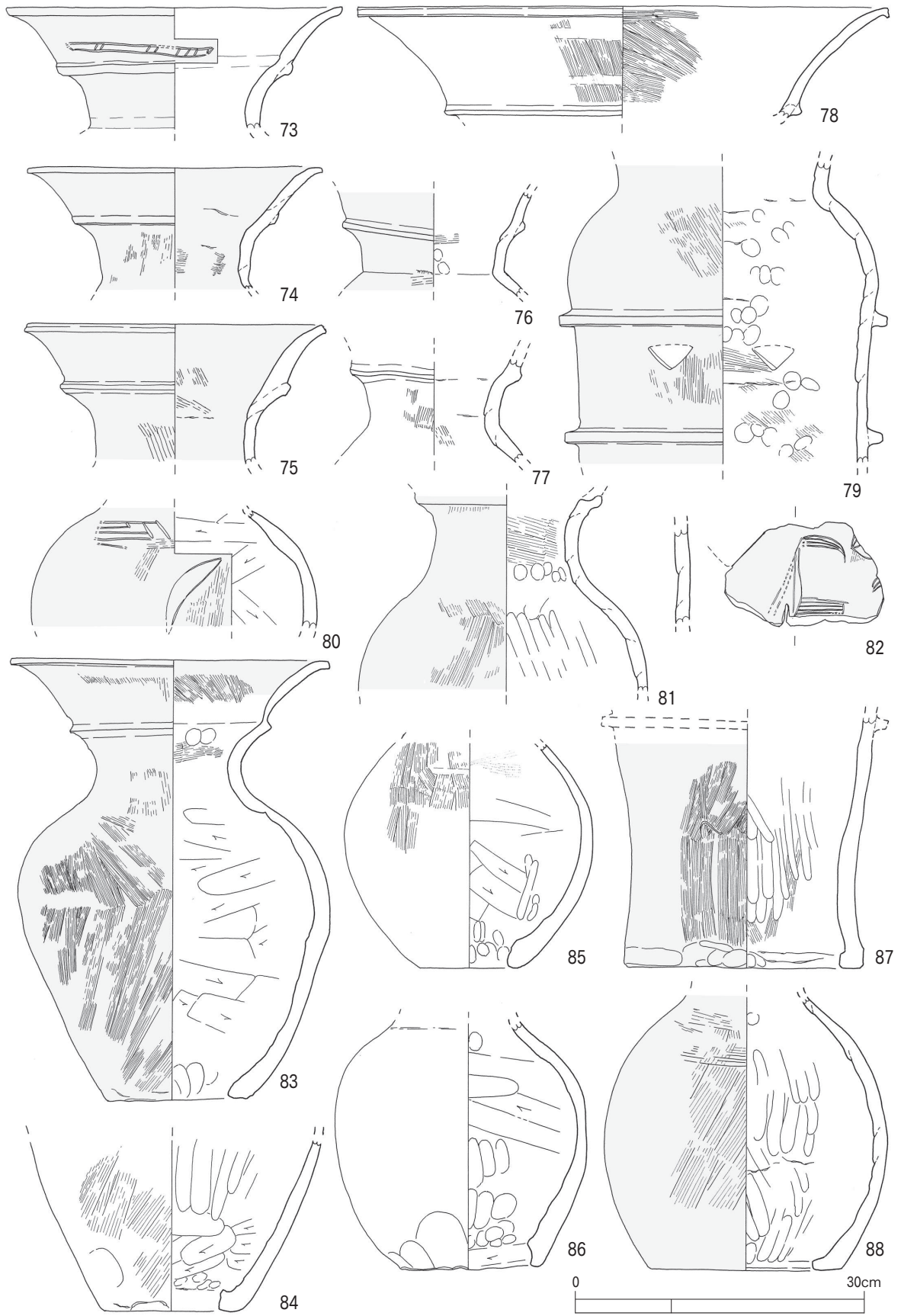
89はⅨトレンチから出土した家形埴輪の破片で破風板と思われる。厚さ1cm、現存長9.7cmを測る。焼成は良好で暗褐色をなす。屋根側の面にはヘラによる施文がみられる。

90はⅣトレンチから出土した破片で、現存長17.2cmを測る。家形埴輪の壁の可能性が考えられるが、厚さが1cm前後と薄く、長軸の両端がわずかに内側に屈曲する点が気になる。焼成は良好で暗褐色をなす。外面には粗目のハケメが残る。

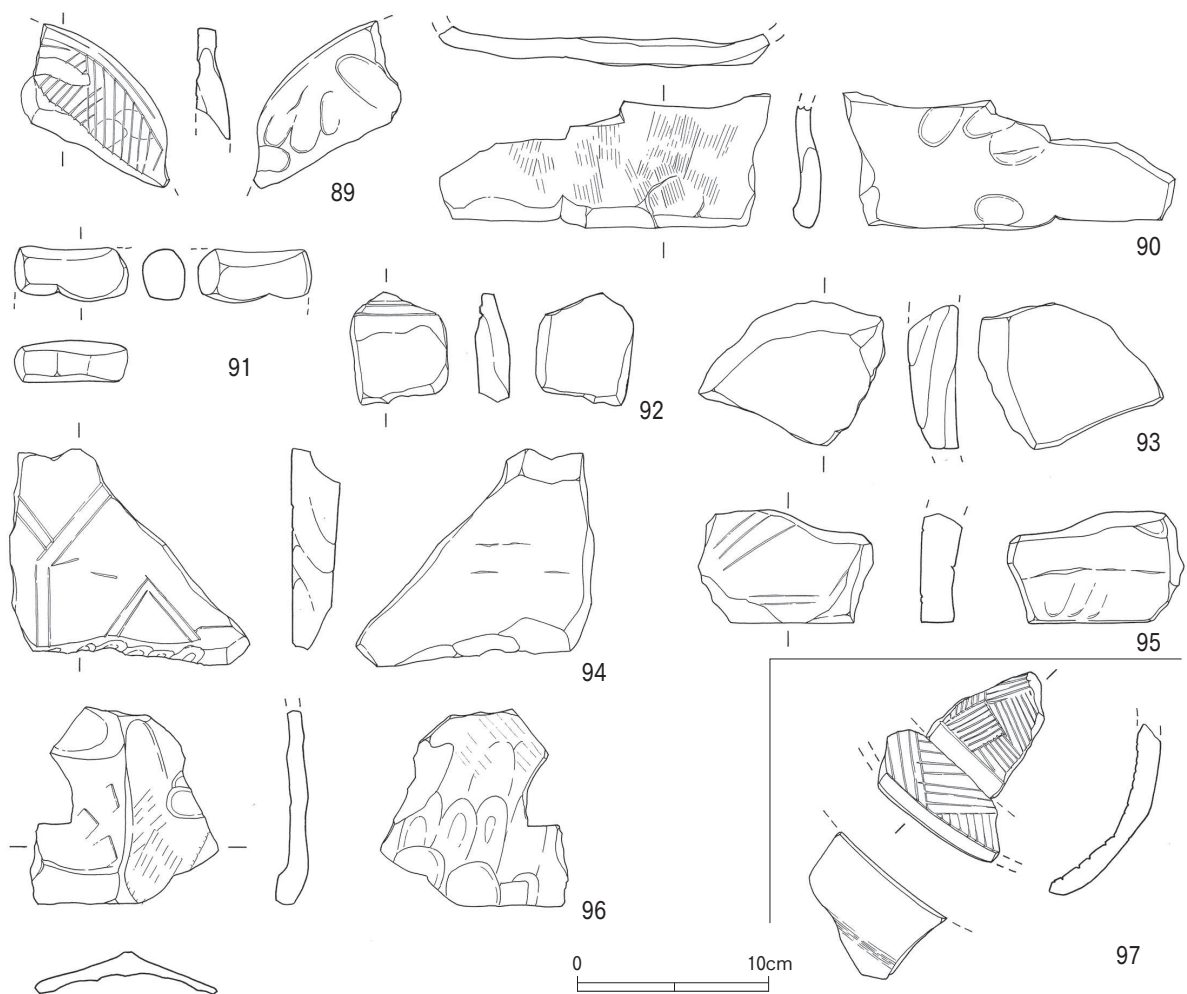
91はⅨトレンチから出土した家形埴輪の破片で堅魚木の可能性が考えられる。直径2.7cm、現存長5.9cmを測る。焼成はやや軟質で明黄褐色をなす。

92～96は家形埴輪の屋根小片で、92、94は採集、93はⅧトレンチ、95はⅦトレンチ、96はⅥトレンチから出土した。92、94、95はいずれも軒先部分にあたるものと思われ、ヘラによる施文がみられる。96は屋根頂部の棟先付近の破片と思われ、左半分は粘土が剥離している。

97は、屋根小片については1次調査報告書に掲載された資料(第36図の9:後円部Aトレン



第 21 図 南側くびれ部出土の壺形・朝顔形埴輪実測図



第 22 図 家形埴輪実測図

チ出土)であるが、再整理において1次調査未報告の破風板片(後円部Dトレンチ出土)と接合したため、再掲したものである。

【参考文献】

志賀智史 2008「前期古墳に用いられた赤色顔料の一様相」『九州国立博物館紀要 東風西声』第4号  
九州国立博物館

新原正典 1989『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書第2集、稲築町教育委員会

高木恭二 1994「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻第5号 財団法人 古代学協会  
(株)中桐造園設計研究所編 2003『沖出古墳公園整備事業報告書』稲築町

円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪 遺物観察表

挿図番号	遺物番号	整理番号	出土地点	器種	部位	法量 (cm)								焼成	色調		赤色顔料の有無		ハケメ本数 (1cm間)	主な調整手法	
						口径	頸部径	胴径	底径	残存高	突帯高	器壁最少	器壁最大		外	内	外	内		外	内
15	1 50	II	円筒埴輪	口縁部～胴部	30.4			15.4	0.7	0.6	0.8	良好	明黄橙	明黄褐			4～5	タテハケ	タテハケ/ナデ		
	2 49	II	円筒埴輪	底部～胴部				21.7	33.8	0.8	0.6	0.8	良好	明黄橙	黄橙			4	タテハケ	タテハケ	
	3 28	VI	円筒埴輪	底部				21.8	8.7		1.0	1.5	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙			3～4	タテハケ/ヨコハケ	ハケ/ナデ	
	4 39	III	朝顔形埴輪	頸部～肩部							1.0	1.5	良好	明黄褐	にぶい黄褐			4	タテハケ/ヨコハケ	ナデ/ヨコハケ	
	5 47	II	壺形埴輪	頸部～肩部				27.0			1.0	2.0	良好	黄橙	黄橙	○		6	タテハケ/ヨコハケ	指ナデ/ヨコナデ	
	6 43	III	壺形埴輪	底部				13.0	7.0		1.0	2.0	良好	黄橙	黄橙			4～5	タテハケ	ナデ/指ナデ	
	7 41	III	壺形(朝顔形)埴輪	頸部～肩部				5.7			1.0	1.5	良好	橙	橙	○		5～6	タテハケ	ナデ	
16	8 79	VII	円筒埴輪	口縁部	30.8			8.8	0.6	0.6	0.8	良好	明黄褐	にぶい黄褐			5～6	タテハケ	ナデ		
	9 78	VII	円筒埴輪	口縁部	33.0			8.2	0.5	0.8	1.0	良好	にぶい黄	浅黄橙			外:7～8 内:3～4	ヨコハケ	タテハケ		
	10 228	IV	円筒埴輪	口縁部～底部	35.3			22.2	46.8	0.8	0.7	1.3	良好	浅黄橙	にぶい黄橙			6	タテハケ/ヨコハケ	ナデ	
	11 109	X	円筒埴輪	口縁部	34.0			10.8	0.6	0.7	0.9	良好	明黄褐	明黄褐			4～5	タテハケ	タテハケ		
	12 83	VII	円筒埴輪	胴部				19.0	0.5	0.8	0.8	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐			6～7	タテハケ	タテハケ/ナデ		
	13 77	採集	円筒埴輪	底部				19.7	20.5	0.5	0.8	1.2	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐			7～8	タテハケ/ヨコハケ	ナデ	
17	14 112	X	朝顔形埴輪	口縁部	45.2			7.8		0.7	2.0	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙			8	ヨコナデ	ヨコナデ		
	15 111	X	朝顔形埴輪	口縁部	47.6			8.5		1.0	1.2	良好	明黄褐	橙	○	○		タテハケ/ヨコナデ	ヨコナデ		
	16 80	VII	朝顔形埴輪	口縁部	52.0			12.0		0.9	1.2	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙			6～7	タテハケ	タテハケ		
	17 115	X	朝顔形埴輪	頸部～肩部	16.8			7.2	1.5	1.0	1.6	良好	明黄褐	明黄褐	○		3～4	タテハケ	ナデ		
	18 114	X	朝顔形埴輪	頸部～肩部	16.2	26.8		16.2	1.3	1.0	1.6	良好	にぶい黄橙	橙	○		4～5	タテハケ/ヨコハケ	指ナデ		
	19 122	X	朝顔形埴輪	肩部							1.2	1.4	良好	明黄褐	明黄褐				ハケ/ナデ	ナデ	
	20 342	IV	朝顔形埴輪	頸部							1.0	1.5	良好	橙	橙	○		4～5	タテハケ	ヨコハケ	
	21 343	IV	朝顔形埴輪	胴部							1.5	1.5	良好	明黄褐	にぶい黄橙	○		4～5	タテハケ	ナデ	
	22 337	IV	朝顔形埴輪	頸部～胴部	19.6	29.4		24.5	1.4	1.0	1.7	良好	明黄褐	橙	○		3～5	タテハケ	ヨコハケ/指ナデ		
	23 103	IV	朝顔形埴輪	胴部			29.2	12.8		1.5	1.6	良好	にぶい黄橙	橙	○		4～5	タテハケ	タテハケ		
18	24 230	X	朝顔形埴輪	口縁部～底部	35.5			32.8	63.8	2.6	0.8	2.1	良好	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	外:12～13 内(口縁):7	タテハケ/ヨコナデ	ハケ/ナデ	
	25 227	I	朝顔形埴輪	胴部～底部			31.6	27.5	39.2	1.9	1.7	2.3	良好	にぶい黄橙	橙	○		12～13	タテハケ/ヨコハケ	タテハケ/ナデ	
	26 117	X	壺形埴輪	口縁部	26.8			7.4		0.7	1.4	良好	橙	橙	○		3	タテハケ/ヨコナデ	ヨコハケ/ヨコナデ		
	27 70	I	朝顔形埴輪	口縁部	32.4			9.0		1.0	1.2	良好	明赤褐	にぶい赤褐	○			ナデ	ナデ		
18	28 118	X	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部	34.4			8.8		0.8	1.6	良好	褐灰	褐灰	○		5～6	ヨコハケ/ヨコナデ	ヨコハケ		
	29 97	IV	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部	31.6			7.6		1.0	1.5	良好	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	2～3	タテハケ	タテハケ		
	30 100	IV	壺形(朝顔形)埴輪	頸部	17.2			9.7	0.6	1.1	1.2	良好	橙	橙	○	○	3～4	タテハケ	ヨコハケ		
	31 89	VII	壺形埴輪	頸部	9.8			8.0	1.1	0.8	1.0	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			ヨコナデ	ヨコナデ		
	32 71	I	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部	14.0			12.4		0.8	1.5	良好	橙	にぶい黄橙	○		6～7	ヨコハケ/ナデ	ナデ		
	33 75	採集	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部	32.6			8.7		1.0	1.2	良好	にぶい赤褐	灰褐	○		5～6	タテハケ/ヨコナデ	ナデ		
	34 88	VII	壺形(朝顔形)埴輪	頸部～肩部	14.4			9.8		1.0	1.5	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		7～8	ナデ/タテハケ	ヨコナデ		
	35 90	VII	壺形埴輪	頸部～肩部	10.4			21.7		0.9	1.0	1.0	良好	明黄褐	橙	○		5	タテハケ	ケズリ/ナデ	
	36 119	X	壺形埴輪	口縁部	20.0	15.6		10.5		0.6	1.2	良好	橙	明黄褐			5～6	ヨコハケ/ヨコナデ	ナデ		
	37 229	IV	壺形埴輪	口縁～胴部	26.6	13.3	29.0	33.3		0.8	1.5	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	5	タテハケ/ナデ	タテハケ/ケズリ		
	38 104	IV	壺形埴輪	底部				11.0	9.3		1.0	2.0	良好	橙	明黄褐			5	タテハケ	ケズリ	
	39 74	I	壺形埴輪	底部				16.6	11.0		1.1	2.0	良好	橙	橙			6～7	タテハケ	指ナデ/指オサエ	
	40 93	VII	壺形埴輪	底部				14.1	14.2		0.9	1.5	良好	にぶい橙	橙	○			タテハケ	指ナデ	
	41 73	I	壺形埴輪	底部				17.8	12.3		1.0	1.5	良好	にぶい黄橙	橙				不明	指オサエ	
	42 120	X	壺形埴輪	底部				15.0	18.6		1.1	2.6	良好	橙	明褐	○		3～4	タテハケ	ケズリ/指オサエ	
	43 121	X	壺形埴輪	底部				10.8	8.2		1.2	2.4	良好	褐灰	灰黄褐	○		3～4	タテハケ	ケズリ/指オサエ	
	44 94	VII	壺形埴輪	底部				16.0	12.6		0.9	2.0	良好	黄橙	黄橙			5	タテハケ	ケズリ/指オサエ	
	45 289	X	土師器(壺)	頸部～胴部		7.1	17.4		16.0		0.5	1.0	良好	にぶい橙	にぶい褐	○	○	7～8	ハケ/ナデ	ヨコハケ/ケズリ	



円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪 遺物観察表

挿図番号	遺物番号	整理番号	出土地点	器種	部位	法量 (cm)						焼成	色調		赤色顔料の有無		ハケメ本数 (1cm間)	主な調整手法			
						口径	頸部径	胴径	底径	残存高	突帯高		器壁最少	器壁最大	外	内		外	内	外	内
19	46	203	IX	壺形埴輪	口縁部	26.2	15.6			10.9		0.8	1.2	良好	にぶい橙	にぶい橙			4	タテハケ	タテハケ
	47	204	IX	壺形埴輪	口縁部～肩部	22.8	16.8			13.2		0.7	1.1	良好	にぶい褐	にぶい橙			4～5	タテハケ/ヨコナデ	ナデ
	48	208	IX	壺形埴輪	口縁部～肩部	21.6	14.2			19.1		0.8	1.2	良好	にぶい橙	にぶい橙			6～7	タテハケ/ヨコハケ	ヨコハケ/指ナデ
	49	200	IX	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部～肩部		16.1			13.7		0.8	1.1	良好	にぶい橙	にぶい橙			6	タテハケ	ナデ
	50	201	IX	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部～頸部		19.1			10.8		1.3	2.0	良好	橙	明黄褐	○		4～5	タテハケ	ナデ
	51	206	IX	壺形埴輪	頸部～胴部		16.0			21.2		0.9	1.6	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙			8～9	タテハケ	ナデ/指ナデ
	52	226	IX	壺形埴輪	頸部～胴部		16.0			13.0		0.7	1.2	良好	にぶい橙	にぶい黄橙			5～6	タテハケ/ナナメハケ	ナデ
	53	240	IX	壺形埴輪	肩部～底部			30.7	13.7	27.5		0.8	1.9	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙			6～7	タテハケ	ナデ
	54	225	IX	壺形埴輪	底部				17.5	16.2		1.2	1.7	良好	橙	橙				不明	指ナデ
	55	217	IX	壺形埴輪	底部				11.4	8.1		1.0	2.4	良好	橙	にぶい黄橙				タテハケ	指ナデ
	56	210	IX	壺形埴輪	底部				13.5	11.1		0.8	1.8	良好	明黄褐	明黄褐			6～7	タテハケ	ナデ/指オサエ
	57	224	IX	壺形埴輪	底部				14.0	13.6		0.6	1.8	良好	橙	橙			7～8	タテハケ	ケズリ/ナデ
	58	216	IX	壺形埴輪	底部				12.7	10.2		0.7	2.3	良好	にぶい橙	にぶい橙			4～5	タテハケ	ナデ/指オサエ
	59	222	IX	壺形埴輪	底部				15.0	14.6		1.1	2.1	良好	橙	橙			6～7	タテハケ	ナデ/指オサエ
	60	189	IX	朝顔形埴輪	口縁部	38.0				8.6	0.6	0.7	1.4	良好	にぶい黄	浅黄			7～8	タテハケ/ナデ	不明
	61	196	IX	朝顔形埴輪	口縁部	40.2				6.4	0.9	0.9	1.4	良好	明黄褐	浅黄	○		5～6	ナナメハケ/ヨコナデ	ナデ
	62	181	IX	朝顔形埴輪	胴部			35.8		15.2		1.3	1.8	良好	明黄褐	オリブ灰	○		8	タテハケ/ナデ	ナデ
	63	238	IX	朝顔形埴輪	頸部～胴部		14.0			42.4	1.5	1.0	1.8	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		8～10	タテハケ/ヨコナデ	タテハケ/ナデ
	64	239	IX	円筒(朝顔形)埴輪	胴部～底部				24.5	25.1	0.7	0.9	1.5	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙			9	タテハケ/ヨコハケ	タテハケ/ヨコナデ
20	65	133	VII	円筒埴輪	口縁部	31.2				11.7	1.8	1.0	1.2	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		外:9～10 内:6～7	タテハケ/ヨコナデ	タテハケ/ヨコナデ
	66	124	VII	円筒埴輪	口縁～胴部	28.6				45.0	1.0	0.8	1.2	良好	明黄褐	明黄褐			4～5	タテハケ/ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ/ナデ
	67	233	VII	円筒埴輪	口縁～胴部	36.6				26.7	0.7	0.6	0.8	良好	にぶい黄橙	にぶい橙			外:7・9(ヨコ) 内:6～7	タテハケ/ヨコハケ/ヨコナデ	タテハケ/ヨコハケ/ヨコナデ
	68	231	VII	円筒埴輪	口縁～胴部	33.5				35.7	0.7	0.8	1.3	良好	浅黄橙	浅黄橙			7～8	タテハケ/ヨコハケ/ヨコナデ	タテハケ/ナデ
	69	135	VII	円筒埴輪	口縁部						0.7	0.7	1.0	良好	黄橙	黄橙				タテハケ/ヨコナデ	ナデ
	70	134	VII	円筒埴輪	口縁部						0.7	0.8	1.0	良好	浅黄橙	浅黄橙				タテハケ/ヨコナデ	ナデ
	71	125	VII	円筒埴輪	胴部～底部				21.8	25.2	0.6	1.0	1.2	良好	明黄褐	明黄褐			4～5	タテハケ/ヨコハケ	ナデ
	72	338	VII	円筒埴輪	完形	36.5			28.3	49.6	0.8	0.7	1.1	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		6～7	タテハケ/ナデ	タテハケ/ナデ
	21	73	148	VII	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部～頸部	35.2	17.7			12.2	0.5	0.8	1.7	良好	にぶい黄橙	橙	○			ヨコナデ
74		153	VII	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部～頸部	30.9	16.3			12.8	0.4	0.7	1.2	良好	橙	にぶい橙	○	○	4～5	タテハケ/ヨコナデ	ヨコハケ/ヨコナデ
75		149	VII	壺形(朝顔形)埴輪	口縁部～頸部	31.4	16.5							良好	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	外:4 内:6	タテハケ/ヨコナデ	タテハケ/ヨコナデ
76		155	VII	壺形埴輪	口縁部～頸部	14.6				10.8	0.6	0.9	1.1	良好	橙	にぶい黄橙	○		6	タテハケ/ヨコナデ	ナデ
77		154	VII	壺形埴輪	口縁部～頸部	13.3				12.5	0.6	1.1	1.5	良好	にぶい黄橙	橙			外:8～9 内:5	タテハケ/ヨコナデ	タテハケ/ヨコナデ
78		147	VII	朝顔形埴輪	口縁部	55.6				11.8	0.8	0.8	1.4	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙			7～8	タテハケ/ヨコナデ	ナナメハケ
79		142	VII	朝顔形埴輪	頸部～胴部		21.8			31.3	1.5	1.0	1.5	良好	にぶい黄橙	にぶい橙	○		4	タテハケ/ヨコナデ	ハケ/ナデ
80		161	VII	壺形埴輪	肩部～胴部			29.6		12.2		0.8	1.6	良好	にぶい橙	橙	○		4	タテハケ/ヨコナデ	ケズリ
81		241	VII	壺形(朝顔形)埴輪	頸部～胴部		15.0	30.3		20.6		1.0	1.5	良好	にぶい橙	橙	○		3～4	タテハケ/ヨコナデ	ヨコハケ/指ナデ
82		137	VII	朝顔形埴輪	胴部					10.0		1.2	1.5	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		外:6 内:9	タテハケ/ヨコナデ	ヨコハケ/ナデ
83		339	VII	壺形埴輪	完形	32.9	14.9	32.3	14.3	46.2		0.5	2.0	良好	にぶい橙	にぶい橙	○	○	6～7	タテハケ/ヨコナデ	ハケ/ケズリ
84		242	VII	壺形埴輪	胴部～底部				13.3	18.4		0.9	2.1	良好	にぶい橙	にぶい橙			3～4	タテハケ	指ナデ/ケズリ
85		236	VII	壺形埴輪	肩部～底部			26.1	10.0	23.6		0.7	2.0	良好	橙	橙			5	タテハケ	ケズリ/指ナデ
86		232	VII	壺形埴輪	肩部～底部			28.1	15.0	26.2		1.1	2.2	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙				ナデ	ケズリ/指ナデ
87		234	VII	朝顔形埴輪	胴部～底部				25.0	26.5		1.3	1.9	良好	にぶい黄橙	にぶい橙	○		10	タテハケ	タテハケ/指ナデ
88		235	VII	壺形埴輪	肩部～底部			29.6	20.0	28.9		0.8	2.0	やや軟質	明黄褐	浅黄	○		5	タテハケ/ヨコハケ	指ナデ

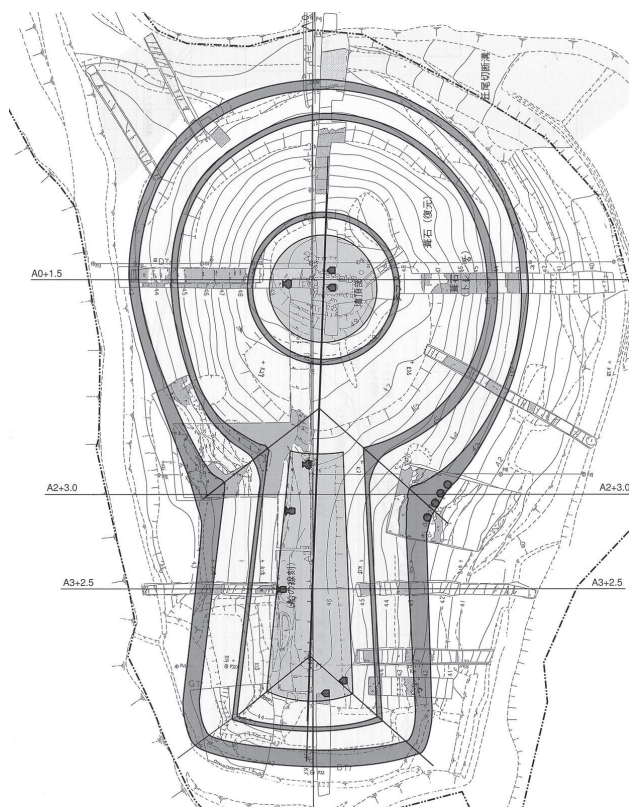
## IV 考 察

### 1. 墳丘の復元

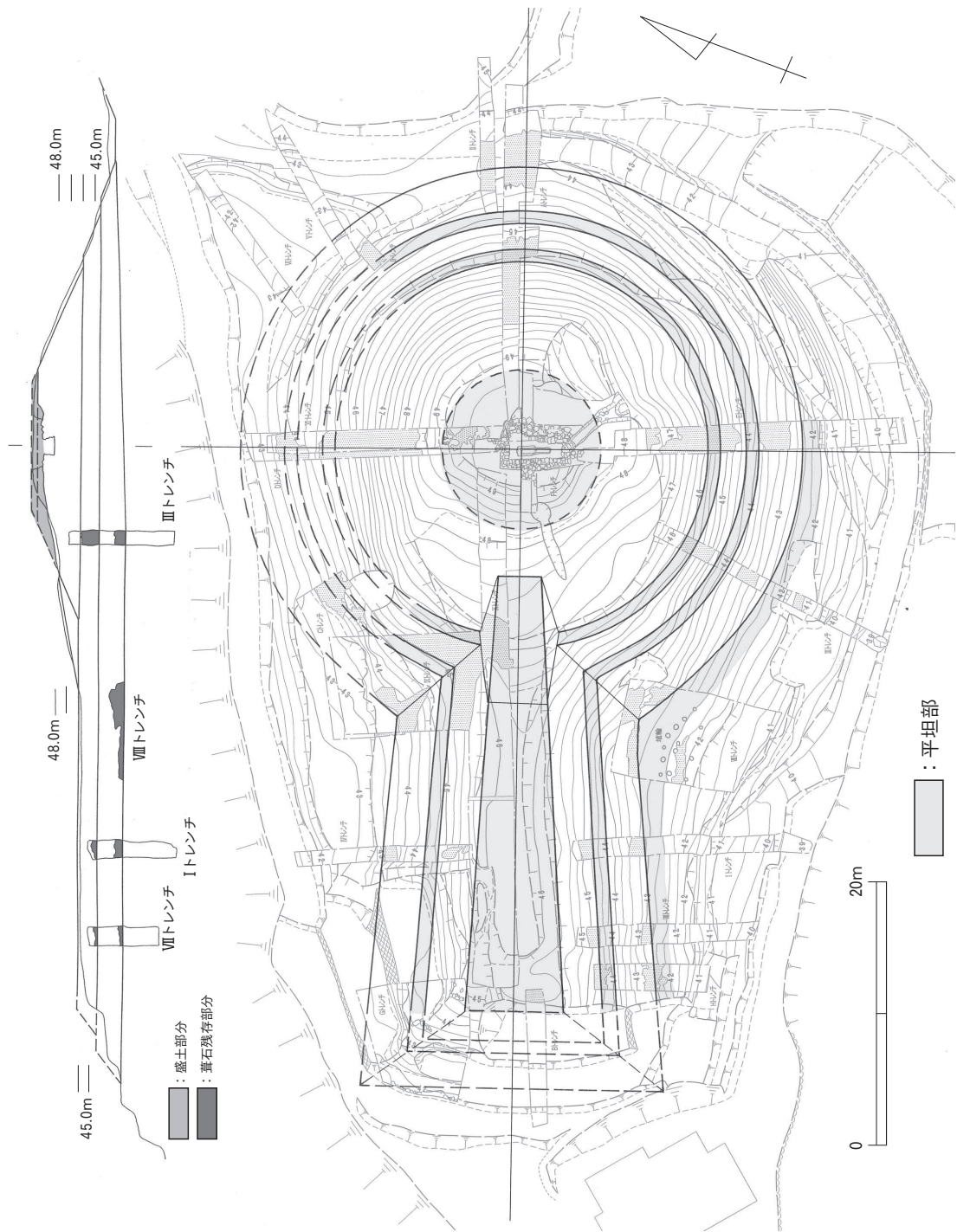
1次調査では、沖出古墳は後円部3段築成、前方部2段築成の前方後円墳で、墳丘規模は全長 $67.6m + a$ 、後円部径 $39m$ であることが推定された。しかし、トレンチ内の流れ込みによる葺石の除去が十分ではなく、葺石の基底石列の検出までには至らなかった。また、くびれ部幅と前方部幅についても確認できずに課題を残した。1次調査での課題を踏まえて、2次調査では、両側のくびれ部検出に成功したほか、各トレンチの大半で葺石の基底石列が残存していることが確認された。それによって、1次調査後の課題であったくびれ部幅と前方部幅についても確定することができ、墳丘主軸ラインの推定も可能となった。

1次調査と2次調査の成果を踏まえて、平成15年に史跡公園として古墳の全面復元整備が実施されており、墳丘規模と後円部については主に1次調査の成果、くびれ部から前方部にかけては主に2次調査の成果が反映されているものと思われる。しかし、整備案(第23図)を参照すると、前方部が左右対称に整然と造成されている一方で、後円部は左右非対称で正円を呈せず段築のバランスも不自然な印象を受ける。前方部に比べて横幅を確保しなければならない後円部の方が構造的に自然地形の制約を受けやすい点は否めないものの、くびれ部を境に前方部と後円部とでこのような技術的格差が生じていることに若干の違和感を覚える。そこで、本報告では改めて墳丘の復元について検討し、整備案(第23図)とは異なる復元案(第24図)を提示しておきたい。なお、墳丘の復元にあたっては、平面と断面・立面との整合性についても考慮しながら検討した。

まず、南側のⅧ・Ⅰ・Ⅶトレンチ及び北側のⅨ・Ⅳトレンチの調査成果を踏まえて、前方部についてみると、前方部は2段築成で、第1段斜面、第2段斜面共に葺石の基底石列が遺存しており、墳端ラインを確定することが可能である。くびれ部の幅は第1段斜面下端で $18.5m$ を測り、前方部先端に向かって直線的に開き、平面は極めて左右対称に造成されていることが確認される。また、立面については、南側斜面を参照すると、前方部



第23図 墳丘復元図(整備案)



第 24 図 墳丘復元図

第 1 段斜面下端は標高 42.6m、第 2 段斜面下端は標高 44.4m でほぼ水平を保って後円部に移行していることが分かる。なお、前方部先端については、1 次調査報告書において述べられている通り、後世の開墾等によって確定することはできないが、現行の地形から大幅に削平されている可能性も低いと思われ、改変を受けた範囲内におさまるものと考えてよければ、先端幅は 1 段目下端で 23.4m 前後となろう。

次に墳丘主軸ラインについてみてみると、整備案（第23図）で示されているように、くびれ部幅と前方部幅が確定できることから、それぞれの中央を通るような主軸ラインが想定可能で、これを後円部へ延長すると、東から北へおよそ20°を振るラインで、竪穴式石室内に安置された石棺北壁直上を通ることが分かる。さらに、主軸ラインに直交するラインを石棺上に求めると、石棺の長軸はこの主軸直交ラインにほぼ平行していることが明白で、石棺が墳丘主軸に直交して配置されていたことが推定される。また、石棺の形態から遺体が北頭位で埋葬された可能性が高いことを踏まえると、遺体の頭部位置がほぼ後円部の中心点に重なることになり、遺体の配置が極めて計画的に予定されていたことが分かる。

このようなことから、後円部の中心点を石棺北壁上に求めた上で、後円部において葺石の基底石列が検出されたⅢトレンチを基準に段築斜面をみてみると、第1段斜面下端は半径21.2m、標高42.6mの地点、第2段斜面下端は半径17m、標高44.6mとなり、前方部の段築斜面からほぼ水平を保って連続していることが分かる。1次調査のA・Eトレンチにおいては葺石の基底石列が検出されていないので平面での検討は厳しいが、両トレンチ共に、墳丘傾斜変換点がⅢトレンチと同じく標高44.8m付近にあることが調査結果から確認でき、この地点を平面に落とすと第2段斜面下端の後円部中心点からの距離は16.5～17mとなり平面上での整合性も高い。また、Aトレンチ、Ⅱトレンチ、Vトレンチで検出された丘尾切断による周溝底面の立ち上がり地点（墳丘側）は、断面図から復元すると後円部第1段斜面下端と一致する可能性があり、平面では後円部中心点から21.3m前後の距離となる。したがって、少なくとも後円部の南側半分においては、後円部中心点からⅧトレンチのくびれ部コーナーまでの距離が22.2mとわずかに間延びしている点を除けば、第1段目、第2段目とも均等な正円形を呈していたことが推定されよう。

北側後円部については、後円部中心点から北側くびれ部Ⅸトレンチのくびれ部コーナーまでの距離は第1段目が22.2m、第2段目が17mと南側で確認された数値と極めて高い精度で整合する。そこで南側で推定された平面プランを墳丘主軸ラインで反転させると、後円部Ⅺトレンチでは、下半分の葺石残存状況が悪く平面から段築斜面を直接検討することは難しいが、標高45m付近のテラス面付近を第2段斜面上端、標高44mより下側の葺石残存部分を第1段斜面上部とみなすことができる（ただし、この場合、下側葺石の石列を第1段斜面の基底石と判断することはできなくなる）。この推測が正しければ、Ⅺトレンチの上半部にみられる葺石残存分が第3段斜面に該当することとなり、第3段斜面下端は後円部中心点より14mの距離、標高45mの地点となる。

一方、南側後円部では第3段斜面を検討できる調査成果が得られていないが、北側後円部Ⅺトレンチの数値を南側後円部Ⅲトレンチで検討すると、後円部中心点から14mの距離は標高45.75mの傾斜変換点付近にあたり、葺石、テラス面は残存してないものの本地点より上部を第3段斜面とみなしても矛盾は生じない。また、前方部の頂上平坦部はXトレンチの調査成果から標高46.1mの数値が得られており、後円部第3段斜面下端の数値（標高45～45.75m）と近似値を示す。以上の検討から、整備案（第23図）では後円部第2段斜面を高く見積もるが、本案では整備案（第23図）で推定された後円部第2段斜面を2つに分離することは可能であると判断した。

最後に、前方部墳頂と後円部第3段斜面の接合部分について検討しておきたい。前方部墳頂Ⅹトレンチの調査では、およそくびれ部にあたる位置から後円部に向かって緩やかな立ち上がりが見られ、原位置を保って壺形埴輪の底部が検出されている。整備案（第23図）では、この立ち上がりを後円部第2段斜面として捉えているが、他の後円部斜面と傾斜角度が大きく異なり、いびつな楕円形を想定せざるを得なくなる。そこで、本案ではこの緩やかな立ち上がりを後円部第3段斜面に取り付くスロープ状の施設として判断した。ここで、現況の墳丘測量図（第2図）を参照すると、後円部西南側（前方部側）の等高線が大きく乱れていることが分かる。本古墳は東側から西側へと伸びる丘陵先端部を丘尾切断によって造成されており、墳丘のほとんどが地山削り出しによるものであることが調査で判明しているが、墳頂墓壇の西側地山面が東側に比べて低い位置にあることが1次調査の結果から確認できることを踏まえると、地山面が東側から西側へと下っていることは明らかで、後円部第3段斜面の南西側上部を地山削り出しによってのみ造成することは不可能で、盛土が施されていたものと思われる（第24図）。すなわち、墳丘測量図にみられる等高線の乱れは、後世に盛土部分が流出したことによるものであり、現在は地山部分のみが残存している状況と判断される。前方部墳頂から後円部第3段斜面に伸びるスロープは地山削り出しによるものであり、東側から西側へ緩やかに下る丘陵斜面を巧みに利用してスロープが造成されていたことがうかがえる。

以上の考察が正しければ、沖出古墳は墳長69.5m前後、後円部径42.4mの前方後円墳であることが推定される。後円部については、本案（第24図）のように左右対称であったのか、整備案（第23図）のように北側が変形するものであったかは、Ⅹトレンチの調査面積のみでは判断材料に乏しく、今後の課題と言えよう。正円の後円部であれば、後世の改変等が想定されるが、墳丘下部に基壇を設けている南側に比べ、北側は改変を受けやすい状況にあったことは間違いない。いずれにせよ、左右対称の前方後円形プランの設計図が元々用意されていた可能性は高く、整備案のように北側が変形する場合は、現地地形に合わせて設計変更がなされたものと判断される。

## 2. 埴輪の構成と配置

### （1）埴輪の構成と特徴

沖出古墳では、円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪、家形埴輪のほか器種が判然としない小片（第22図90）が確認されている。円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪の割合を比較すると、形状が判別できる資料242点のうち、円筒埴輪36%、朝顔形埴輪25%、壺形埴輪39%となり、円筒埴輪に対して、朝顔形埴輪と壺形埴輪の割合が非常に高いことが特徴として挙げられよう。また、円筒埴輪に比べて、朝顔形埴輪と壺形埴輪では赤色顔料の使用率が非常に高いことも指摘できる。

沖出古墳の円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪については、工人集団の抽出を念頭に置いた検討がこれまでになされており（中村2003、中村・井上2008）、以下では先学を参考に本古墳の埴輪にみられる技術的な特徴について簡単に触れておきたい。

円筒埴輪は、3条4段の構成で、逆三角形の透かし孔を穿つもの（第20図66）と透かし孔を

穿たないもの（第20図72）とがみられる。器壁が非常に薄く（胴部で0.8cm以下）、低い突帯を有するものが大半を占める中、やや厚手の器壁に高い突帯を有するもの（第20図65）が破片で2点のみ確認されている。内面調整については、ナデ調整を主体とするもの、ハケ調整を主体とするものなど、また、全体のプロポーションについても胴部がラッパ状に開くもの（第16図10）、筒状に伸びるもの（第20図66）など製作技法や形状にいくつかのバリエーションがみられるが、焼成等を含めて全体の仕上がりは均質で規格性の高さがうかがえる。円筒埴輪製作に携わる工人間の技術的格差が小さいことが推察されよう。

壺形埴輪は、単口縁（第18図37）と二重口縁タイプ（第21図83）が出土しているが、数量的には二重口縁タイプが大半を占める。全体のプロポーションは、肩が張るもの（第21図83）と寸胴のもの（第21図88）とに大別されるが、明確に区分できるものではなく、個体差が大きい。また、胴部の内面調整にはヘラケズリや縦方向の強い指ナデなどが特徴的にみられ、寸胴のものに縦方向の強い指ナデ、肩が張るものにはヘラケズリが多用される傾向はあるものの、明確な相関があるわけではない。壺形埴輪については、製作技法の共有はある程度みられるものの、比較的シャープなものから稚拙なものまであり、円筒埴輪のような仕上りの規格性の高さはうかがえない。円筒埴輪の工人集団とは異なり、工人間の技術格差があったことがうかがえる。

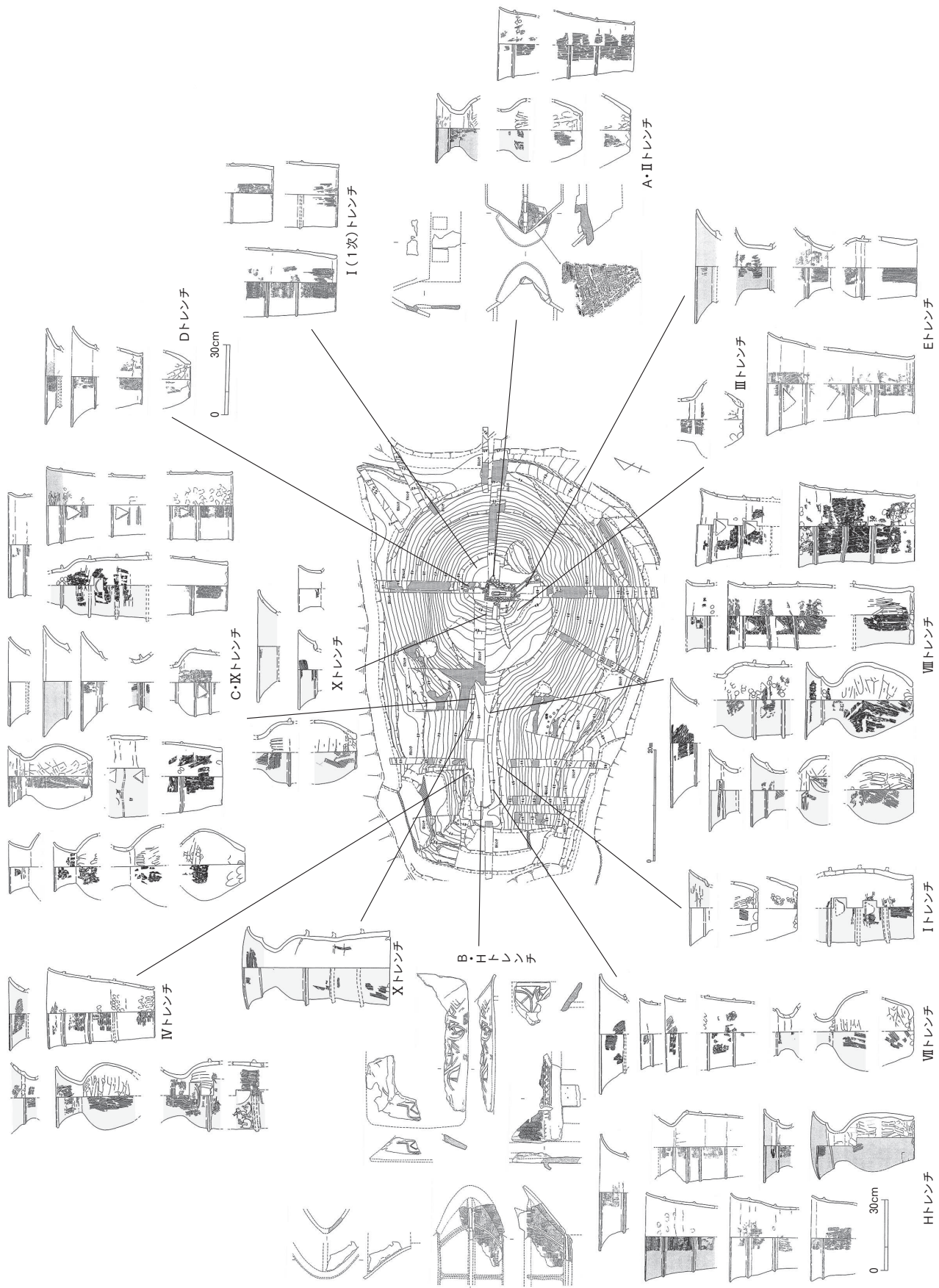
朝顔形埴輪については、製作技法等が円筒埴輪と共通するものと壺形埴輪と共通するものが含まれているのが大きな特徴である。すなわち、円筒埴輪の特徴である器壁が薄く低い突帯を有するもの（第21図78）と壺形埴輪に顕著にみられる厚手の器壁に縦方向の強い指ナデを内面調整とする（第17図18）ものなどがあり、円筒埴輪と壺形埴輪の製作工人集団が、それぞれ朝顔形埴輪の製作にも関与していることがうかがえる。朝顔形埴輪の透かし孔は、逆三角形や三角形、不整形のもの、円筒埴輪に比べてバリエーションが多いのも、異なる工人集団が製作に関わっていることの傍証となろう。

## （2）埴輪の配置復元（第25図）

沖出古墳で原位置を保って出土した埴輪はごく一部で、出土資料の大半は墳丘上から転落したものである。各トレンチの調査成果から、墳丘テラス上の樹立は基本的に想定しにくく、本古墳の場合、埴輪は墳頂と南側くびれ部の基壇上のみ樹立されたたていたものと思われる。円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪の出土量から、墳頂は後円部、前方部共にこれらの埴輪で囲繞されていたことが推定されるが、具体的な配列を復元することは前述のごとく不可能である。しかし、各トレンチから出土した埴輪を検討することで、埴輪の配置をある程度復元することは可能であると思われるので、ここでは、1次調査及び2次調査で出土した主要な埴輪の出土位置を検討することで、本古墳にみられる埴輪の配置について考察しておきたい。

家形埴輪は、後円部のAトレンチ、Dトレンチ、IIトレンチ、VIトレンチ、くびれ部のIXトレンチ、前方部のBトレンチ、Hトレンチ、IVトレンチ、VIIトレンチから出土している。

くびれ部のIXトレンチ出土資料は破風板（第22図89）と堅魚木（第22図91）の小片のみで他は出土していない。また、後円部のAトレンチとDトレンチから出土した屋根小片と破風板小片



第 25 図 埴輪配置推定図

が接合（第22図97）するなど、後円部及びくびれ部の各トレンチから出土した資料は本来、後円部中心付近に配置されていたものが転落した可能性が高いと考えられる。後円部では網代表現の切妻造と無文の屋根・壁をもつ切妻造の家形埴輪が1次調査で出土しており、後円部中心に少なくとも2棟の家形埴輪が配置されていたことが確実である。

前方部では、先端付近のBトレンチ、Hトレンチで最も出土量が多く、前方部墳頂の先端部に家形埴輪が配置されていたことが想定される。1次調査で、網代表現の切妻造、無文の切妻造、有文の入母屋造の埴輪片が出土しているが、入母屋造の埴輪片には別個体の資料が含まれていることが、今回新たに判明しており、少なくとも4棟の家形埴輪の配置があったことが確実となった。また、1次調査では精緻な作りの高床式の壁破片も出土しており、前方部の家形埴輪群の方が、質・量ともに後円部より優れた内容となっている。平野部に面する前方部先端が山手側の後円部よりも重視されたということであろうか。

展望が開ける平野側が埴輪配置において重視されたことは、円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪についてもうかがえる。すなわち、南側くびれ部の墳裾にあたる基壇上にはやや広い空間が設けられ、円筒埴輪と朝顔形埴輪が複数配列されていた。また、山手側にあたる北側に比べて、南側には相対的に大振りな埴輪を優先的に配列した状況がうかがえる。これに対して、北側では単口縁の壺形埴輪の配置が前方部において顕著にみられる。現時点で、単口縁の壺形埴輪はくびれ部のⅨトレンチ、前方部のⅣトレンチのみで少数出土しており、意図的な配置がうかがえる。また、同じくⅣトレンチからは、他界観念を示す船と辟邪を表すと思われる抽象文様を線刻した朝顔形埴輪が出土しており、単口縁壺形埴輪の配置と合わせて南側とは異なる意味が北側の埴輪配置には込められていたと思われる。

壺形埴輪については、墳頂を圍繞するほか、墳頂の要所にも配置されていたことが確認できる。1次調査では後円部Dトレンチ墳頂の埋葬施設に近い位置で底部片を含む壺形埴輪が検出されている。また、2次調査では前方部から後円部第3段斜面に取り付くスロープ施設の登り口付近でも壺形埴輪の底部片が原位置で検出されている。

#### 【参考文献】

新原正典 1989『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書第2集、稲築町教育委員会

（株）中桐造園設計研究所編 2003『沖出古墳公園整備事業報告書』稲築町

中村利至久 2003「福岡県・沖出古墳」『埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』  
科学研究費補助金 基盤研究C（2）、東京国立博物館

中村利至久・井上義也 2008「福岡県・沖出古墳」『日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転から見た古墳時代政治史の研究』科学研究費補助金 基盤研究B（2）、東京国立博物館



## V 総括

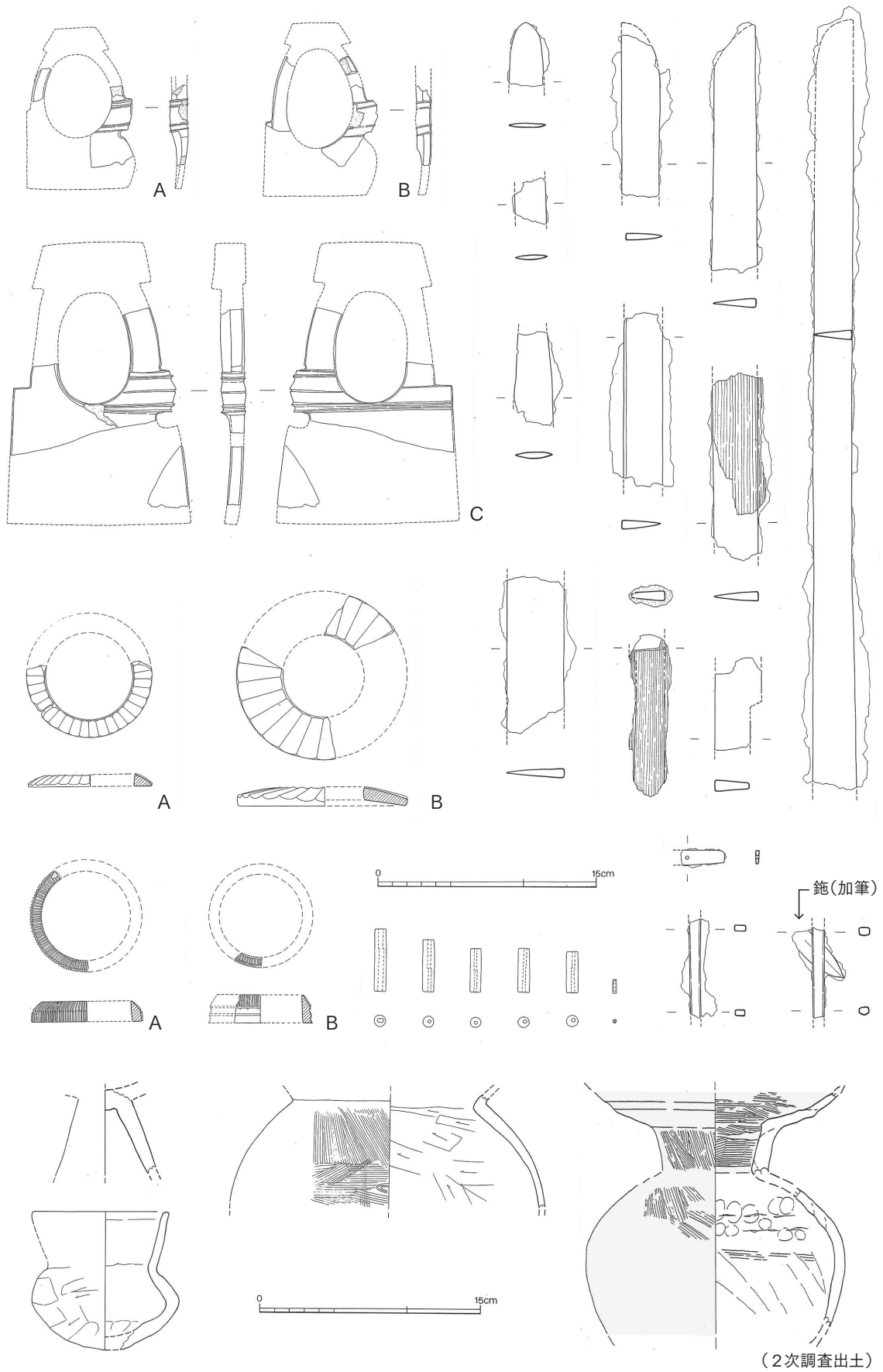
**墳丘と外表施設** 本報告では、沖出古墳は墳長 69.5m 前後、後円部径 42.4m の前方後円墳であったことが推定された。後円部径については、嘉穂盆地で古墳時代前期前半に築造された大型円墳である忠隈 1 号墳とほぼ同規模の数値を示しており、本古墳の築造にあたり忠隈古墳の墳丘規模が意識された可能性がある。古墳は、丘尾切断によって丘陵先端を後円部 3 段、前方部を 2 段の前方後円形に造成するが、平野に面した南側については、第 1 段斜面の下部にさらに基壇を設け、古墳をひと際大きく見せる造作が施されている。基壇を除くすべての墳丘斜面には人頭大から拳大程の石を用いて葺石が施されたほか、墳頂は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪で圍繞され、後円部中央及び前方部先端の要所に冢形埴輪複数個体が配置された。また、南側の墳頂には北側に比べて相対的に大きな埴輪を配列し、南側くびれ部の基壇上にも円筒埴輪と朝顔形埴輪を複数個体配置するなど、古墳の南側を荘厳化する仕掛けが施されているのに対して、北側前方部には、辟邪を表す線刻や他界観念を示す船の線刻がある埴輪を配置するなど、南側と北側とでは埴輪の配置に明瞭な差異がみられた。

**埋葬施設** 埋葬施設は後円部に竪穴式石室が 1 基設けられているのみである。石室内の四壁及び床面にはベンガラが塗布されており、内部には砂岩製の舟形石棺が安置されていた。舟形石棺内部には、朱が塗布されていたことが判明している（志賀 2008）。遺体の頭部が後円部の中心となるように意図的に石棺配置がなされているため、結果的に竪穴式石室の位置は後円部中心から南側へとずれている。また、竪穴式石室は小口面を長側壁で挟み込む特殊な構造で、箱式石棺の構造と類似する。このようなことから、埋葬施設に竪穴式石室を採用しているとはいえ、中央政権とは異なる古墳祭祀が執り行われた可能性が推察されるが、現状で具体的な葬送儀礼の復元ができるような成果までは得られていない。ただし、例えば石棺配置と石室構築との先後関係を考えてみた場合に、このような構造の石室であれば、石棺の搬入に先立ちある程度の高さまで石室壁を部分的に構築しておくことも可能である。なお、石棺の後円墳頂部への搬入路については、平野に面する南側が最も適していると思われることから、1 次調査において最終的に盗掘坑として判断された石室南側小口面から南東部へ伸びる溝状の攪乱坑が、後世の攪乱を受けているとはいえ、やはり石棺搬入路の痕跡である可能性は排除できないと考える。

**副葬品** 本古墳の埋葬施設は数度の盗掘を受けていたため、副葬品の大半は遺存しておらず、鉄刀 1 振が棺外で原位置を保って検出されたほかは、石室内の覆土及び盗掘坑から、玉類、腕輪形石製品、鉄器類等の残欠が出土しているのみである。1 次調査で報告された副葬品は次のとおりである（第 26 図）。

鋤形石 3、車輪石 2、石釧 2、管玉 6、ガラス玉 1

鉄刀 3 以上、鉄剣 1、鉄鏃 2、刀子 1、鉄斧 1



第 26 図 副葬品と供献土器

本報告にあたり、鉄器類の再確認を行ったところ、上記以外に刃部長が3cmを超える鉈の刃先1点が新たに確認された。また、剣として報告されているもの以外に、剣か平根系の鉄鏃か判別が付かない刃先の小片資料が数点みられるほか、鉄鏃の茎もしくは工具類の基部と思われる断面長方形の棒状の破片が、他の鉄器小片に錆付いてみられる。刀剣、矢、農工具の鉄器類については、それぞれまとまった数量が本来副葬されていた可能性は高いものと思われる。

管玉、腕輪形石製品については、1次調査の報告書刊行後、研究の進展がみられるので、それらの研究成果を踏まえて再評価しておきたい。管玉については、6点のうち5点が大型品で大賀克彦の分類で領域F、1点が小型品で領域Se、共に石材は北陸西部系の緑色凝灰岩である（大賀2013）。いずれも、光沢があり、比較的硬質の石材を用いている。鋏形石については北條芳隆の分類（北條1994）、車輪石と石釧については蒲原宏行による分類（蒲原1991）、石材については北條芳隆の分類（北條1994、2013）及び岡寺良の分類（岡寺1999）を参照にして、それぞれの特徴について列記すると次のとおりとなる。

鋏形石A：第1群（A類・B類の別は不明）、北陸産石材一材質2（岡寺：材質Ⅲ）

鋏形石B：第1群A類、北陸産石材一材質2（岡寺：材質Ⅲ）

鋏形石C：第2群A類、北陸産石材一材質4（岡寺：材質Ⅳ）

車輪石A：I a類（断面F）、北陸産石材一材質2（岡寺：材質Ⅲ）

車輪石B：I b類（断面A）、北陸産石材一材質2（岡寺：材質Ⅲ）

石釧 A：I a類、北陸産石材一材質1（岡寺：材質Ⅱ）

石釧 B：Ⅲ a類、北陸産石材一材質2（岡寺：材質Ⅲ）

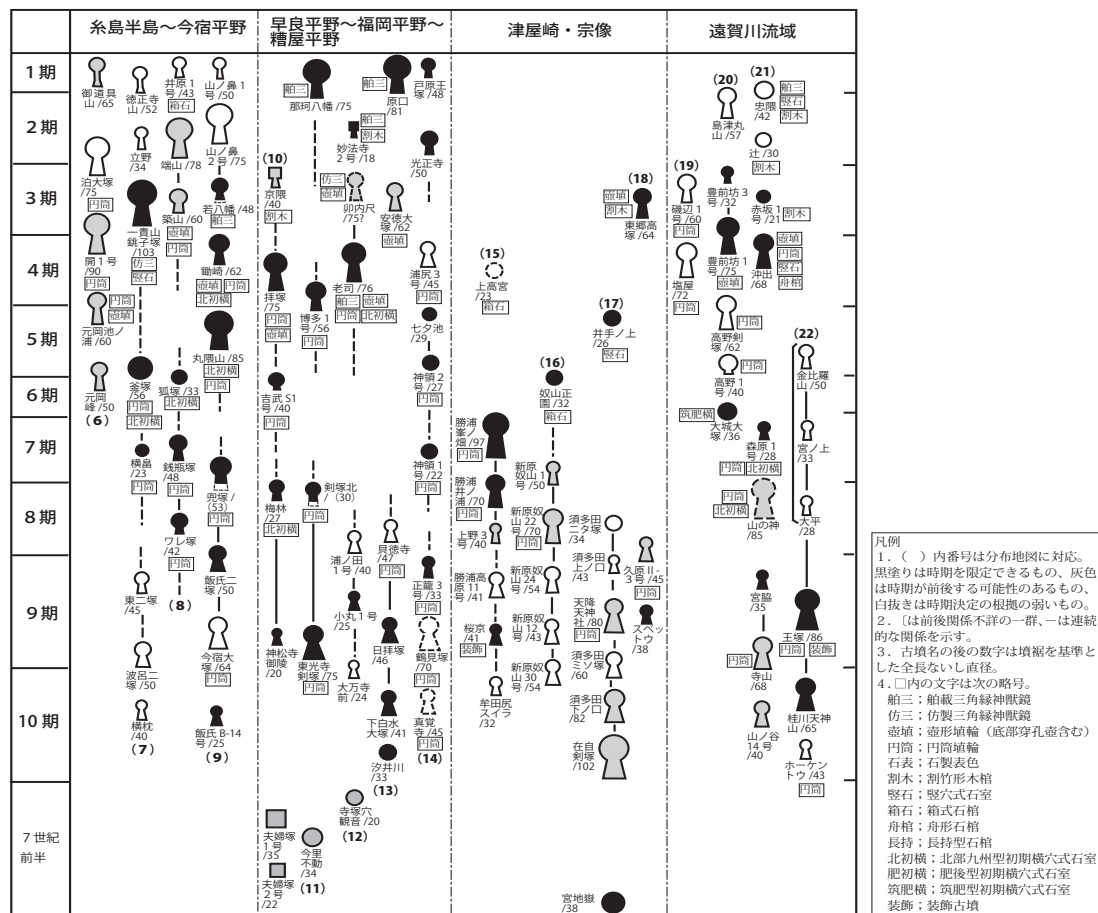
本古墳の場合、腕輪形石製品3種類それぞれに複数個体が存在するが、同規格とみられるものはなく、いずれも形状が異なるもの同士の組み合わせである。また、石材については軟質の緑色凝灰岩（材質2）を主体とするが、材質が異なるもの（材質1、4）を含む。こうした形状や石材の違いは論者によって、若干の相違はあるものの、工人集団の差（系統差）や製作時期の段階差（時期差）として理解できるもので、本古墳に副葬された腕輪形石製品には系統が異なる新古のものが混在していると評価できる。伝世を認める立場に立てば、2段階ないしは3段階の時期差を想定することも可能で、2段階とみた場合、比較的硬質の緑色凝灰岩（材質1）を用いる石釧Aが管玉と共に石製品の中では古相を呈する一群となり、3段階とみた場合には、残りのグループから緑色の葉理が縞状に入る緑色凝灰岩（材質4）を用いた大型の鋏形石Cと水平な底面（断面F）を有する車輪石Aを新段階（三浦2005など）の一群としてさらに分離することができよう。

なお、調査事例が増加した今日においても、九州で鋏形石、車輪石、石釧の3種類がそろって出土する古墳は、依然、沖出古墳のみである。また、本古墳が、腕輪形石製品の中で分布域が最も狭い鋏形石の分布の西限となっている点も変わっていない。

古墳の年代観と被葬者像 副葬品については、盗掘を受けており全体像が不明であるため、時期決定には不確定要素が多いものの、管玉・腕輪形石製品の様相は前期後半、また刃部長が3cm

を超える鉤の副葬は中期的な様相を示す（松浦 2014）。埴輪については、鋤崎古墳（福岡県福岡市）や谷口古墳（佐賀県唐津市）などと共に北部九州における円筒埴輪の導入期にあたる資料として評価されるが、胴部から口縁部にかけて直線的に開くプロポジションを呈するものが含まれるなど、導入期（1期）の埴輪群の中ではやや新しい様相が認められる（竹中 2006）。中期初頭の鋤崎古墳より後出するとなれば、中期初頭から前葉の年代観が想定されうる。また、沖出古墳の墳丘上からは、祭祀に用いたと考えられる小型丸底土器、二重口縁壺、高杯などが出土している（第 26 図）が、これらの土師器群が葬送儀礼に伴うものであれば、小型丸底土器の形態は、筑豊Ⅳ期（松浦・福本 2017）に該当する資料となろう。鋤崎古墳出土の小型丸底土器は筑豊Ⅲc 期新相に併行するものと思われ、埴輪から導かれる年代観との整合性も良い。本古墳は、北陸産石材の管玉・腕輪形石製品の副葬や二重口縁壺の供献のように前期的要素を強く残しているものの、総合的に判断すれば、古墳時代中期初頭から前葉にかけて築造された古墳と評価されよう。なお、本報告では帯金式甲冑の出現以降を古墳時代中期と評価する立場である。

沖出古墳は、本古墳が位置する遠賀川上流域のみならず、筑前東部地域における古墳時代中期を画する古墳として重要である。本古墳には赤色顔料が付着した鋸形石、車輪石、石釧の腕輪形石製品が副葬されており、被葬者には司祭者的要素がみられるが、沖ノ島祭祀遺跡からも鋸形石、



第 27 図 筑前地域の大型前方後円墳（重藤 2012 より改変）

車輪石、石釧の腕輪形石製品が出土している点に注意しておきたい。すなわち、遠賀川流域から現在、沖ノ島を抱える宗像地域にかけての地域（筑前東部地域）は、弥生時代以来、墓制などの文化的親近性が高く、地政学的には「奴国」、「伊都国」などが位置していた筑前西部地域とは異なる文化圏を形成してきたと言える。当該期の北部九州における大型前方後円墳の分布（第27図）をみると、筑前西部地域では老司古墳、鋤崎古墳などが築造されているのに対し、筑前東部地域では遠賀川下流域の古墳と並んで沖出古墳が主要な位置を占めていることが分かる。当該期は、沖ノ島祭祀がヤマト王権の主宰によって本格化する時期にあたるが、壱岐・対馬を経由する大陸への航海ルートを確保する筑前西部地域の首長層にとって、沖ノ島はさほど重視されることはなかったものと思われる。むしろ、沖ノ島は、筑前東部地域以東の首長層にとって重要な意味を持つ場所であり、沖出古墳の被葬者についても、沖ノ島祭祀に参画していた蓋然性は高いのではなかろうか。内陸に位置する沖出古墳の埴輪に描かれた写実的な外洋船は海浜集団との交流をも示唆するものであろう。

末筆になりましたが、調査担当者の新原正典氏と上野智裕氏からは、本報告書作成にあたり、有意義なご助言をいただきました。また、埴輪の再整理にあたっては、柳井茶臼山古墳研究会（研究代表者：古谷毅、連携研究者：犬木努）の参加諸氏よりご指導とご支援を賜りました。記して謝意を表します。

#### 【引用・参考文献】

- 大賀克彦 2013「玉類」『古墳時代の考古学4』副葬品の型式と編年、同成社
- 岡寺 良 1999「石製品研究の新視点－材質・製作技法に着目した視点－」『考古学ジャーナル12』No453、ニューサイエンス社
- 蒲原宏行 1991「腕輪形石製品」『古墳時代の研究8』古墳Ⅱ副葬品、雄山閣
- 志賀智史 2008「前期古墳に用いられた赤色顔料の一様相」『九州国立博物館紀要 東風西声』第4号九州国立博物館
- 重藤輝行 2012「北部九州」『古墳時代の考古学2』古墳出現と展開の地域相、同成社
- 竹中克繁 2006「古墳時代前期における九州の埴輪」『前期古墳の再検討』第9回九州前方後円墳研究会大分大会、九州前方後円墳研究会
- 北條芳隆 1994「楯形石の型式学的研究」『考古学雑誌』第79巻 第4号、日本考古學會
- 北條芳隆 2013「腕輪形石製品」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4、同成社
- 松浦宇哲 2014「古墳出土農工具からみた北部九州の地域性－福岡県内出土事例を中心に－」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会 大分大会、九州前方後円墳研究会
- 松浦宇哲・福本寛 2017「筑豊の古式土師器」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会、九州前方後円墳研究会
- 三浦俊明 2005「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学友の会

# 圖 版





1. 墳丘の調査状況①(真上から)



2. 墳丘の調査状況②(南側から)





1. トレンチ全景



2. 葺石出土状況



3. 上段葺石



4. 下段葺石



5. 埴輪出土状況



1. IIトレンチ全景



2. IIトレンチ周溝



3. Vトレンチ周溝



4. VIトレンチ周溝

後円部の調査2 (II・V・VIトレンチ)



1. トレンチ全景



2. 葺石出土状況



3. 上段葺石



4. 下段葺石



1. I トレンチ全景



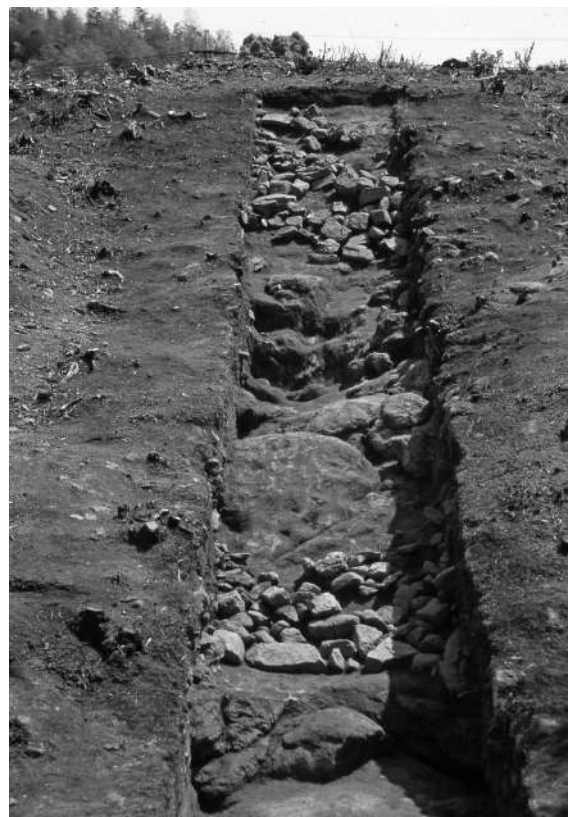
2. 上段葺石



3. 下段葺石



4. IV トレンチ全景



5. 葺石出土状況

前方部の調査 1 (I・IV トレンチ)



1. VIIトレンチ全景



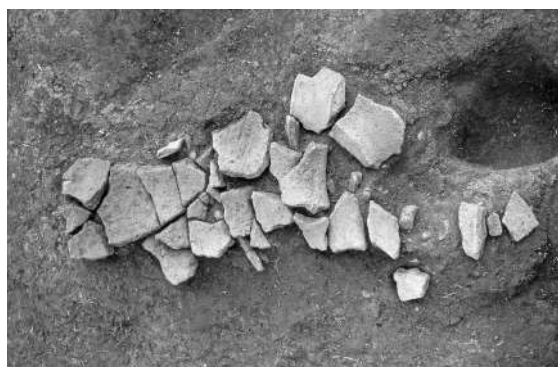
2. 葺石出土状況



3. Xトレンチ全景



4. 壺形埴輪出土状況



5. 朝顔形埴輪出土状況

前方部の調査2 (VII・Xトレンチ)



1. IXトレンチ全景①(後円部側から)



2. IXトレンチ全景②(前方部側から)

北側くびれ部の調査1 (IXトレンチ)



1. 上段葺石



2. 下段葺石

北側くびれ部の調査2 (Ⅸトレンチ)



1. Ⅷトレンチ全景



2. 葺石・埴輪出土状況（後円部側から）

南側くびれ部の調査1（Ⅷトレンチ）





1. 埴輪列出土状況①

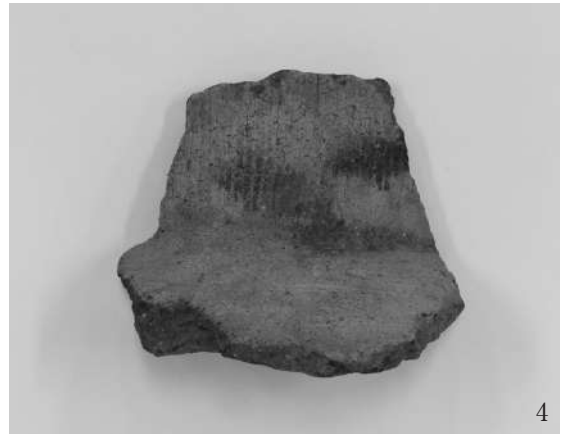


2. 埴輪列出土状況②



3. 埴輪出土状況

南側くびれ部の調査2 (Ⅷトレンチ)



後円部出土の埴輪



前方部出土の埴輪 1



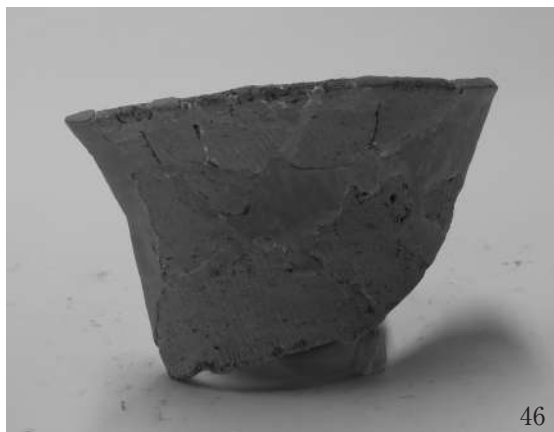
前方部出土の埴輪 2



前方部出土の埴輪 3



前方部出土の埴輪・土師器



北側くびれ部出土の埴輪 1



北側くびれ部出土の埴輪 2

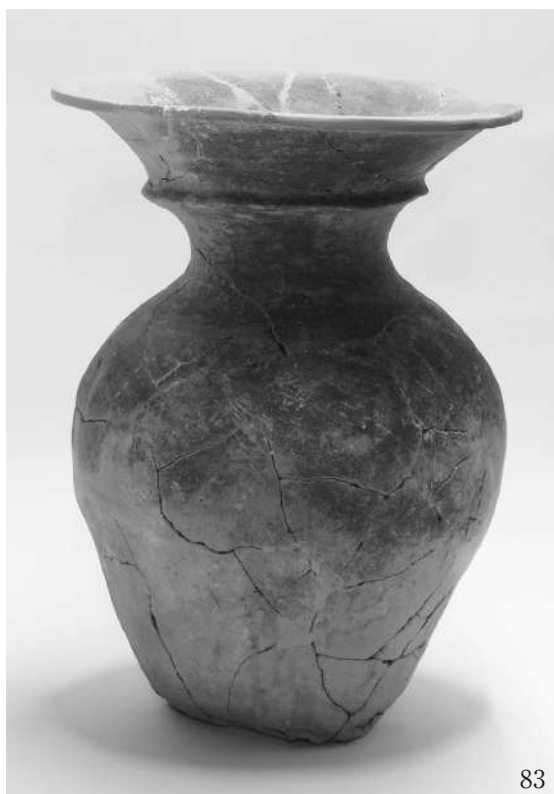




南側くびれ部出土の埴輪 1



南側くびれ部出土の埴輪 2



南側くびれ部出土の埴輪3

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おきでこふん							
書名	沖出古墳Ⅱ							
副書名	平成9・10年度の範囲内容確認調査							
シリーズ名	嘉麻市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	松浦宇哲							
編集機関	嘉麻市教育委員会							
所在地	〒820-0392 福岡県嘉麻市大隈町733番地							
発行年月日	2017年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
おきでこふん 沖出古墳	福岡県嘉麻市漆生 78-1、78-2	402273	1004	33° 34' 48130"	130° 43' 17"	1997/1998	326	史跡整備の ための範囲 内容確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沖出古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 竪穴式石室 舟形石棺	円筒埴輪 朝顔形埴輪 壺形埴輪 家形埴輪 土師器		葺石基底石が各調査区で比較的良好に残存していることが確認され、南側くびれ部では埴輪列も検出された。また「船」の線刻埴輪片が前方部北側から出土した。		
要約	<p>昭和62・63年度の1次調査では、前方部2段、後円部3段築成の前方後円墳であることが推定された。また、盗掘を受けていたにもかかわらず、鍬形石・車輪石・石釧の破片が出土し、3種の腕輪形石製品の副葬が確認された。</p> <p>平成9・10年度の2次調査では、1次調査後の課題であったくびれ部や前方部幅の確認に成功し、墳丘主軸ラインの推定が可能となった。その結果、墳長69.5m前後、後円部径42.4mの前方後円墳であることが推定された。ただし、後円部北側については墳丘ラインの推定に課題を残している。また、埋葬施設は、墳丘主軸に直交して設置されており、後円部中心点に被葬者の頭部が配置されていたことが想定された。</p> <p>墳丘上からは1次調査、2次調査において多量の埴輪が出土しており、原位置を留める埴輪は少ないものの、埴輪の構成と配置をおおよそ復元することが可能である。本古墳は、墳頂部を円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪で囲繞し、後円部中心及び前方部先端に家形埴輪を配置していたことが想定された。特に平野に面する墳丘南側と前方部先端は、埴輪配置においても重視されていたことが推定された。</p>							

嘉麻市文化財調査報告書 第4集

沖出古墳Ⅱ

平成29年3月31日

発行 嘉麻市教育委員会  
嘉麻市大隈町733番地

印刷 西部印刷  
福岡県嘉麻市飯田157

